主な内容	
2面	総会・同期会
3～4面	支部総会・同期会
5面	寄稿
6面	支部総会・同期会・寄稿
7面	維持会費納入者一覧
8面	維持会費納入者一覧・決算書
9面	寄稿
10面	支部総会・寄稿
11面	寄稿
12面	支部総会・寄稿
13面	在校生の活躍・お知らせ
14面	同期会・お知らせ

佐渡高校同窓会報

発行所　佐渡高等学校同窓会
代表　鈴木　啓介
題字　川上治美(昭47年卒)
〒952-1322 新潟県佐渡市石田567
新潟県立佐渡高等学校内
振替　00620-3-805
☎(0259)57-2155代
FAX(0259)52-5253

学業成就祈願！(太宰府天満宮にて)

ご挨拶

同窓会長　鈴木　啓介

同窓生の皆様、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃より同窓会活動にご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

令和7年を迎えましたが、今年は昭和に換算するとちょうど100年にあたります。多くの同窓生が生まれ育った昭和は、戦争と平和、貧困と豊かさ、停滞と発展という、激動の時代でした。

令和の現在も、ウクライナでの紛争や不安定な国際情勢、「令和の米騒動」に代表される国内の経済変動など、先の見えない時代を私たちは生きています。しかし、昭和と令和には大きな違いがあります。その一つが人口減少問題です。将来に希望が持てた昭和とは異なり、令和では未来を担う子どもたちの数が減り続けています。

残念ながら、佐渡も例外ではありません。2023年の佐渡市の出生数は183人に過ぎず、2000年の534人と比べると大幅な減少です。新潟県教育委員会が発表した県立高校の将来構想でも、今後、佐渡地域の募集学級数が減らされることが示されており、私たちは少子化という現実に直面しています。このような状況の中、同窓会として佐渡高等学校の活動をどのように支えていけるのかを考えていきます。

令和6年度の同窓会活動報告

さて、昨年度(令和6年度)の同窓会活動についてご報告させていただきます。

昨年も例年通り8月25日に総会および懇親会を開催し、多くの皆様にご参加いただきました。旧交を温め、世代を超えた交流の輪が広がる貴重な時間となり、改めて同窓の絆の深さを感じることができました。また、島内各支部、関東、関西、新潟、中部支部でも例年通り支部総会が開催されております。多くのご参加をいただき誠にありがとうございます。

令和5年度から開始した学生用の個人ロッカー寄付については、昨年も継続し、1学年200人分の提供を行いました。本年4月の新入生にも寄付を行い、全校生徒分の提供が無事完了いたしました。生徒たちの学校生活の一助となれば幸いです。

その他にも、エアコン補助やクラブ活動の遠征費補助など、学生の活動支援を行わせていただきました。今年は陸上部が伝統ある春の高校伊那駅伝に参加し、素晴らしい成績を収めました。今後も生徒たちが様々な分野で活躍してくれることを期待し、些少ですが活動費の補助をおこなってまいります。

長年の課題であった同窓会会費のコンビニ払いにつきましては、利便性は高いことはわかっていたのですが、手数料や手続きの煩雑さから導入が困難でした。事務担当者の多大な努力のおかげで、ようやく導入にめどが立ち、本年から開始することとなりました。コンビニでも使用できる振込用紙はこの同窓会会誌とともに同封されております。同窓会活動は皆様からの会費とご協力で成り立っています。今後も皆様の負担の軽減を図っていきたいと考えておりますので、何かご提案等ございましたら、お気軽にご連絡ください。

創立130周年に向けて

そして来年はいよいよ佐渡高等学校創立130周年を迎えます。昨年11月より準備委員会を、そして本年6月には正式に創立130周年記念行事第一回実行委員会を開き、本格的に準備を開始しています。各部会に分かれて、素晴らしい記念行事となるよう検討を進めておりますので、こちらにつきましても寄付を含め、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

最後になりますが、佐渡高等学校のさらなる発展と同窓会会員の皆様のご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

ご挨拶

学校長　川上　豪

佐渡高等学校校長として二年目、教頭時代も含めると四年目を迎えました川上でございます。

同窓会の皆様からは、生徒の諸活動や教育環境の整備等でさまざまにご助力いただいており、改めて感謝申し上げます。

引き続き、皆様方のお力もお借りしながら、佐高生は勿論のこと、佐渡の生徒たちがそれぞれの夢を実現できるよう、微力ではございますが精一杯努めてまいりたいと思います。

さていよいよ、佐渡高校創立百三十周年が来年度に迫って参りました。先日、鈴木同窓会長様を実行委員長として、同窓会・PTA・学校による創立百三十周年記念行事実行委員会が立ち上がり、記念事業についての相談検討が始まっているところでございます。

また、同窓会本部役員の皆様方からも実行委員会の各担当係に入っていただいております。

今後、事業の概要や詳細、さまざまなお願いなどが同窓生の皆様のところに届くこととなります。何卒篤いご支援をいただきたくお願い申し上げます。

また、来年度以降予定される本校関連の大きな動きとしましては、皆様ご存じのとおり全国的な少子化の影響により、令和八年度の本校の募集学級数が五から四に変わり、百六十人の募集定員となり、同時に、募集停止となる佐渡中等教育学校内に、佐渡高等学校両津キャンパス(一学級募集)が設置される予定となっております。

現在新潟県教育委員会、本校、設置場所となる中等教育学校による準備委員会が立ち上がり、具体的な中身について検討・準備を進めているところでございます。

このように、社会の情勢は刻々と変化しておりますが、今も昔も高等学校教育に求められているものは、主体的に学び、自ら未来を切り拓き前進・成長していく生徒を育てることだと考えます。昨年も申し上げましたが、目標に向かって自身を高め続けるには、目標真理への飽くなき探究心と、冷静に軌道修正しつつ自ら前進する志、他者を尊重し協働していく姿勢、それこそ佐高の校訓である「自主自律」「求真窮理」「協調責任」「誠実感謝」が求められているものと考えます。

これからも、学校職員の力を合わせ生徒の「学習力」と「人間力」の育成に邁進したいと思います。

今年度に入っての部活動(現時点での全国・北信越大会以上)について、この場をお借りして報告申し上げます。

▽北信越大会出場
・陸上競技部
男子800m(県優勝)
男子400m
男子やり投げ
女子5000mW
(2名)
男子3000mSC
男子円盤投げ
・男子バトミントン部
学校対抗
・男子バレーボール部
▽全国総合文化祭出場
(香川県開催)
・将棋部門(男子個人)
また相川分校においては、
▽全国定通体育大会出場
・男子バスケットボール競技(県優勝)
・陸上競技
男子1500m
(県優勝)
・柔道(団体選抜選手)

本稿作成時点でありますが、以上の成績を残すことができました。今後とも在校生の活動活躍にご声援いただけますよう、お願い申し上げます。

改めまして、同窓生の皆様には、ますますお元気でご活躍くださいますようご祈念いたしますとともに、今後とも佐渡高校へのより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年度佐渡高校同窓会並びに懇親会報告

令和6年8月25日（日）佐渡高等学校同窓会総会並びに懇親会が、窪田のRyokan浦島で、開催されました。ここ数年各方面に影響を与えていた新型コロナウイルスも第5類に移行し、会員同士の距離を少し近くできるようになりコロナ以前と同規模の総会および懇親会が開催されました。

午前10時30分から総会が開催され、令和5年度事業報告、会計決算報告、令和6年度事業計画、会計予算が上程され、活発な意見交換等も行われ参加者全員の承認をいただきました。総会終了後には、恒例のアトラクションとなっております佐渡高校吹奏楽部の部員の皆様による校歌や応援歌等の演奏が行われ、参加者は歌詞を口ずさみながら聴き入っていました。

演奏終了後は、懇親会が開催され、来賓の佐渡市長から祝辞をいただき、林隆行副会長の乾杯で会は進められ参加者は久しぶりの再会に歓談し近況を報告しあったりと会話がはずんでいました。

祝宴盛会のなか永田副会長により佐渡高校と同窓会の発展を祈念し、参加者全員で万歳三唱を行い、最後に次期開催支部の金沢支部長畠山茂樹氏から閉会の挨拶をいただき次回の再会を誓い、懇親会は盛会のうちに無事終了となりました。

真野支部　山本充彦

校長挨拶

幹事挨拶

市長挨拶

会長挨拶

懇親会

総　会

令和7年度 佐渡高等学校同窓会総会

と　き　令和７年８月24日（日）
総　会　　10：30～11：20
アトラクション　11：30～12：00
懇親・交歓会　　12：00～14：00
ところ　Ryokan浦島 ☎（0259）57-3751
会　費　5,000円

昭和42年卒喜寿を祝う会

昭和42年3月（第17回）卒業の「喜寿を祝う会」を令和6年9月19日（木）に佐和田の「旅館入海」にて行いました。

校歌斉唱から始まり、亡くなった同士達を偲んで黙祷、会長の挨拶、乾杯を経て歓談が開始されました。久しぶりの友人たちとの語らいでもう席はめちゃくちゃ。懐かしい顔を見ると、いつの間にやらあの高校時代に戻ったようにはしゃぐ顔、途中でアトラクションの新穂大野の鬼太鼓が入り、獅子が全員の頭を噛んで場内を回った時には「これで少し寿命が延びたかな」と大喜び。新米やシャインマスカットの差し入れもあって大盛況でした。

参加者73名（男49名、女24名）同期卒業生数533名（普通科482名、家庭科51名）

同期会　幹事

卒業50年、みんな集まれ！

「高校卒業50年たったし、古稀の祝いも兼ねて今年のうちに同期会やらんかさ!!」という発声のもと、急遽同期会の開催を決めました。

令和7年5月24日(土)アートホテル新潟駅前を会場に【佐渡高校卒業50周年・祝古稀記念同期会】と題して開催しました。記念撮影、挨拶の後、懇親会。懐かしい面々との再会で会場はすぐに熱気に包まれました。一時間半後、熱気ムンムンの中、幹事作成のスライドショーが始まります。ビートルズのBGMの中、当時まだ白黒写真だった卒業アルバム・卒業20年後の会・50歳の記念の会そして還暦祝いの会それぞれのスナップ写真がスクリーンに流れます。皆、スクリーンに釘付け。最後に現在の佐渡高校の様子。中には涙ぐむ人もいたりして約30分のスライドでしたが、とても思い出深いスライドショーになりました。その後も歓談は続き、最後に竹内まりあの「人生の扉」をBGMに当時の古い校舎の写真が流れ、校歌斉唱。あっという間の三時間でした。そのままの流れで同じホテルでの二次会。続いて近くの居酒屋での三次会。中身の濃い数時間を過ごせました。今回は80名の参加でしたが、皆70歳を目前にして、リタイヤした人も多く、親の介護、自分の健康、老後の心配等いろいろあるようです。そんな中、こうやって会える幸せを噛み締めて、同期生との再会を楽しんでくれたんじゃないかと思っています。そしてみな笑顔で帰って行きました。佐渡から、関東圏から、新潟県内、その他大阪、山梨、長野と遠くから来てくれて感謝の気持ちでいっぱいです。

尚、残金68,235円を佐渡高校同窓会に寄付したいと思います。幹事一同で決めました。

幹事 小浜庸子（昭和50年卒）

令和6年度 佐渡高校受用寮・関東支部祭 開催

令和6年11月7日(木)、秋晴れの一日。高齢者にとっては難敵のコロナ禍が一段落、多くの困難が緩和されて5年振りに「佐渡高校受用寮・関東支部祭」が、東天紅上野本店にて開催された。

幹事連としても5年の空白は大きく、「今年は開催出来るだろうか…」と模索していたところ、「今年こそ出来るよう！」、「今年は開催しナ…」と何人かの先輩方のお声を聞いて、幹事連も急遽開催に向けての検討を開始した。

開催期日、会場の選定、内容の検討に始まり、5年前の資料を確認すると数名の物故者の有る事も分かり、何名の参加者が有るのか一抹の不安を抱えながらも約60名の皆様に開催案内を送付した。

内容は、柳　濤雪（やなぎとうせつ・日展会員）（柳　信治昭和33年卒・受用寮出身・赤泊）さんの「篆刻との出会い」と題した講演をお願いした。

心配した参加者は18名。久方振りの再会を喜び、柳さんの講演に聴き入り、篆刻書の実演に心を奪われ、恒例の「デカンショ節」、「受用寮・寮歌」を合唱する頃にはすっかり高校生に戻ったように肩をたたき合い、あっと言う間に過ぎる時間を大いに楽しんだ。

全員が「来年も絶対やろう…!!」と。幹事は「どうしよう…!!」と。

楽しい、楽しい短かった秋の一日であった。

（文責・北嶋　准・41年卒）

関東支部 第27回総会・懇親会のご案内

★**日　時**　**令和7年9月28日（日）**
受付開始　10時20分
総　会　11時から11時20分頃
記念講演　11時20分頃から12時頃
講　師　**高松亮太先生(平成15年卒)東洋大学文学部教授**
演　題　**「江戸文学と佐渡の伝承」**
懇親会　12時10分頃から14時30分まで
○アトラクション
・岩見理奈さんによる民話の語り
・若波会の皆さんによる佐渡民踊

★**会　場**　**主婦会館プラザエフ（9階スズラン会場）**
東京都千代田区六番町十五番地
（JR四ツ谷駅麹町口より徒歩1分、地下鉄南北線四ツ谷駅3番出口、および地下鉄丸ノ内線四ツ谷駅1番出口から徒歩3分）
03－3265－8111（代）

★**会　費**
一般会員　10、000円
卒業後4年以内の会員　7、000円
夫婦同伴会員（一人）　8、000円

★**お申し込み要領**
・関東地区在住の方…同窓会報に同封（添付）の返信はがきに切手を貼って投函して下さい。
締切は**9月16日(火)**です。
・その他の地区の方…佐高同窓会本部事務局または直接、関東支部事務局までご連絡下さい。

★**お　願　い**
・旧佐渡女子高校同窓会（紫苑会・関東支部）の皆様のご出席をお待ちしております。

★**連　絡　先**　ご不明な点がございましたら左記まで。
・関東支部事務局
090－4171－7947　木村広幸
・本部事務局
0259－57－2155

第26回 同窓会関東支部 総会・懇親会を振り返って

関東支部の第26回総会・懇親会が昨年の9月29日（日）、学士会館に於いて、約80名の同窓生にお集まりいただき、盛大に開催されました。

記念講演にはペットボトルアートでTVにも多数ご出演の本間ますみ先生（昭和61年卒）をお迎えし、『価値観を変える挑戦』と題したご講演を行っていただき、ペットボトルで作成した鳥や魚など様々な生物などの作品とともに製作時のご苦労などをご紹介いただきました。とてもペットボトルで作ったとは思えない鮮やかな作品の画像が目に焼き付いています。

午後の懇親会は、鈴木同窓会長と川上学校長のご挨拶で始まりました。特に川上校長の「以前に勤務していた佐渡高校に戻って来られて嬉しかった」というご挨拶に、私たちも熱いものがこみ上げました。

乾杯のご発声は、3名の同総会副会長による力強いもの。その勢いのまま、宴会の冒頭から大盛り上がりです。

さて、演芸は、YAMATOさんのミニ・ライヴと若波会の皆さんによる佐渡民謡ショーです。特にYAMATOさんは元日に発生した能登半島地震の被災地に定期的に慰問を行うなど、ボランティア活動を続けている最中に時間を割いて参加してくださいました。頭が下がる思いです。

演芸が一段落し、つづいて、喜寿・傘寿・米寿の方々に、最高齢と最年少2名を加えた皆さまに紅白饅頭をお渡しし、心ばかりのお祝いとさせていただきました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、エンディングは皆さんで校歌を合唱し、同窓会本部事務局の鈴木先生による万歳三唱でお開きとなりました。

前回辺りから、平成卒の若い方々の参加も増えて来ましたので、今年も若い方々にお集まりいただき、老若男女が一堂に会して同窓会を彩ってくださることを期待しております。

佐渡高校同窓会関東支部
事務局長　木村広幸　記

祝 副支部長

川上豪 学校長

鈴木啓介 同窓会長

記念講演講師
本間ますみ先生

3名の副会長による乾杯

本部事務局
鈴木昭教先生

佐渡高校校歌を歌う副会長と有志

米寿、傘寿、喜寿の皆様（＋最年長、最年少）

喜寿記念の同期会報告 よくここまで生きてきたもんだ！

昨年九月二五日佐和田の「浦島」で盛大に「佐渡高校昭和四十一年卒喜寿記念同期会」と銘打って長寿を祝う会を催しました。

遠くは大阪・名古屋から五十九名が参加。夕方六時からの開宴で時間は短かったのですが高校時代の濃縮な時を呼び戻し、二次会のカラオケまで、青春の歌は夜が更けても続いた楽しい一夜でした。

我々の同期会は「佐高四一（ヨンイチ）会」と称する幹事会を組織しております。遡れば平成一九年九月に「還暦の会」を、平成二九年九月には、杜甫曰く「人生古来稀なり」の「古稀の会」を、いずれも「浦島」で開催、そしてこの度の「喜寿の会」へと繋がっています。

宴会前の記念写真では、それなりの歳になっていると思い気や、酒席についたとたんに中国の伝統芸能「変面」の如く、皆高校時代の顔に戻ったのが不思議でした。

我々の同期は、二年生時の思い出が強く残っています。六月には新潟国体でボート部が全国三位となり、加茂湖畔で熱烈な応援をしました。その後の新潟地震では、校舎が倒壊するかと思いました。関西への修学旅行では、なぜ男女別々の旅行なのか、学校側と集会を開きました。以後男女同じゅうしての修学旅行になりました。このことから十六回生は、男女仲が良いと云われるようになりました。又、バス交通の普及もあり、自転車通学や冬期下宿が減ってきました。戦後生まれの、団塊の世代中間期の学年で一学年一〇クラス、生徒約五〇〇人の時代です。学校側も大変だったようです。

卒業アルバムがありません。薄っぺらな「昭和四十年度卒業写真集」という各クラス集合の写真があるのみ。この写真集を「還暦の会」時に復刻し、参加者に配布しました。

さて人生一〇〇年時代へとなってきました。「傘寿の同期会はどうするか?」、喜寿の会の席上でも話題になりました。が、明日はどうなるかわかりません。幹事の共通認識は、「成り行き任せ」という回答です。

昭和四十一年卒（新制十六回生）
末武　正義

新潟支部 令和7年度定期総会・講演会・懇親会のご案内

★**日　時**　**令和7年10月26日(日)**
受付開始　10時30分～
総　会　11時～11時50分
記念講演　11時50分～12時50分
講　師　新潟高等学校長、新潟県高等学校長協会長　市野　正廣　様（昭和62年卒）
演　題　新潟県の高校の将来について
懇親会　13時～15時

★**会　場**　**アートホテル新潟駅前　4階「越後」**
新潟市中央区笹口1－1
電話　025－240－2111

★**会　費**
一般会員　**8,000円**
卒業10年以内の会員　**6,000円**
（総会・講演会のみ参加の場合は1,000円）

★**お申し込み方法**
・同窓会報に同封の返信はがき（新潟地区在住の方）、左のQRコードでお申し込みいただくか、新潟支部事務局または同窓会事務局まで電話かメールでご連絡ください。
締切り：9月10日(水)

★**お願い**
・紫苑会・北溟会の皆様のご出席をお待ちしています。
・新潟地区在住の方以外の参加も大歓迎です。
・若い世代の方々で同期会を開催していない卒業年の皆様には、ぜひ、出席して、同期の絆を深めてください。

★**連絡先**　ご不明な点がございましたら左記までご連絡ください。
・新潟支部事務局
080－1306－1393　槁本敏郎（事務局）
090－6684－8941　近藤美津子（事務局）
e-mail sakoniigata@gmail.com
・佐渡高校同窓会事務局
0259－57－2155

佐渡高等学校同窓会 新潟支部 令和6年度定期総会・講演会・懇親会

佐渡高校同窓会新潟支部の令和6年度定期総会が10月27日、新潟市中央区のホテルで開かれ、市内外から約60人が出席しました。恒例となっている講演会では、世界文化遺産に登録された佐渡金銀山がテーマとなり、参加者は熱心に聴き入っていました。

開会の挨拶で中山道夫支部長（昭和48年卒）は、急速に少子化やデジタル化が進む中、母校の行方を気にしながらも、「嘆くばかりでなく、きっと時代に合わせた形に佐高が変わってくれる。楽しみにしながら、支援しようではありませんか」と呼びかけました。

続いて佐高同窓会の永田治人副会長（昭和43年卒）が、鈴木啓介同窓会長（昭和58年卒）のメッセージを代読しました。物価が上がる中、部活動の遠征費の負担が増えているとして、同窓会による激励費を増やしたことや、若い世代も参加しやすいよう同窓会公式LINEも設けたと紹介。令和8年度の創立130周年に向け、さらに同窓会活動を盛り上げたいと意気込みを示しました。

佐渡高校の今の様子については、川上豪校長にご説明いただきました。令和5年度も文武ともに、在校生の活躍が目を引きました。そうした中、川上校長は島内の出生数が減る現状に触れた上で、「一人一人を輝かせ、『学習力』とともに、『人間力』のある生徒を育てたい」と力を込めました。

講　演

総会に続く講演では毎年、佐渡に関したトピックが取り上げられます。今回は、「佐渡を世界遺産にする新潟の会」副会長、佐々木充さん（昭和35年卒）が「佐渡から江戸へ～御金荷（おかねに）の道～」をテーマに語りました。

江戸幕府を支えた佐渡の金をどのように運んだのか、スライドを交え、「スタートは佐渡奉行所で、十貫目入りの箱を馬に乗せました」「北国街道、中山道を使い、13泊14日が標準でした」といった具合に、道順を追う形で説明がありました。有志が実際にルートをたどり、各地で歓迎を受けたこと、歴史や交通の面でどんな特徴があるかを詳しく語っていただき、数百年前にタイムトラベルした気分になりました。

講演後は、お待ちかねの懇親会です。佐渡の酒蔵から提供していただいた地酒を傾け、あちらこちらに話の輪ができました。

最年長の出席者だった摩尼久晴さん（昭和28年卒）は、「広いグラウンドをみんなで走り回ったり、学校に続く坂を上ったり、下りたり」と若い頃を思い返しました。「小木とか、全島から生徒が来ているから、いろいろ話すのが楽しかった」と充実した高校生活だったようです。

また懇親会で乾杯役を務めた、元野球部の渡邊満さん（平成3年卒）は先輩と野球の話を通し交流できたと教えてくれました。「世代を超えて盛り上がれるのが、同窓会の醍醐味ですね」と笑顔でした。

盛況のうちに終わった令和6年度の新潟支部総会。次回の開催は令和7年10月26日の予定です。多くの方の参加を待っています。

中山支部長

永田副会長

川上校長

佐々木さん

懇親会

アフター古希の会

昭和46年卒の同期会が令和6年8月9日、佐和田の「焼とりやじま東大通店」で開催された。

ちょうど1年前の夏に実施したプチ同期会で、「そういえばおれたちの古希祝いの会、やってなかったよなー」との声があり、それで「アフター古希の会」と名づけて実施することにしたのである。

会の案内はメールやラインを活用するにとどめた。そのため声かけできなかった人がいたのは申し訳ないが、それでも全国各地から31名が集まってくれたのはありがたかった。皆71歳か72歳になっていた。

金曜日の昼の12時から、メイン幹事の矢田親成君の進行で始まり（幹事メンバーは他に渡邉日出子さん、矢島陽子さん）、これまでに亡くなられた同級生に黙とうを捧げたのち、矢田君によるユーモアあふれる開会のあいさつ、そして乾杯へと進んだ。

乾杯の音頭は濱口俊一君に依頼してあった。やおら立ち上がった彼は開口一番、「えー、今日は乾杯をスウェーデン語でやります」と宣言して皆を驚かせた。

なに、スウェーデン語で乾杯？なぜ？と質問をはさむいとまもなく、「スウェーデン語で乾杯はスコールといいます。それじゃーみんな、大きい声でスコールといってください。スコール！」「スコール！」「スコール！」「スコール！」

思いがけないスコールで、場は一気ににぎやかになった。

一人ずつ近況報告も行われた。興味深い話が次々に披露される。ジョークも飛び交う。もっと聞きたい。だがあまり長くなると歓談の時間が削られてしまう。来し方と現在を手短に話すのはむずかしい。続きはあとで個別に聞くことにし、まずは、今さらながらではあるが顔と名前を覚えよう。私たちの同級生は総勢389名。知り合えなかった人も多いのである。

旧交を温め、さて、これからどう生きていこう。「人生七十古来希なり」は昔のこと。70歳はもう古希とはいえまい。齢を取っても志を新たにし、新しいことにもチャレンジしていこう。閉会のあいさつで、僭越ながらそういわせてもらった。

（幹事メンバー　斎藤明雄）

昭和天皇と佐渡

山田　詩乃武（昭和52年卒）

本年、令和七（二〇二五）年は昭和百年、戦後八十年という節目の年でもある。「昭和」は太平洋戦争、敗戦を経験した日本史上、激動の時代であった。

昭和天皇は、戦前は大日本帝国憲法下における「統治権の総攬者」として、戦後は日本国憲法下の「象徴」として両方の「天皇の立場」を経験した唯一の天皇である。歴代天皇の中でも特殊な天皇であった昭和天皇と佐渡に配流され非業の死を遂げた特異な天皇であった順徳天皇。「昭和天皇と佐渡」と題し、昭和天皇の佐渡での順徳天皇への胸懐を記してみたい。

還御の望みは潰えたと悟った順徳天皇は、悲痛な日々を過ごされていたが竟に、九月九日の重陽の節句に御命を果たそうと決意し絶食したが叶わず、仁治三（一二四二）年九月十二日、最期は焼石を額にあてるという壮絶な死を遂げる。宝算四十六。

「都忘れ」という名の野菊がある。野春菊とも深山嫁菜（みやまよめな）とも呼ばれる。薄紫や桃、白色の可憐な花を咲かす。生前、順徳天皇はこの野辺に咲く花を愛で心を慰め、都恋しさを忘れたという。花言葉は「しばしの慰め、別れ」。

いかにして契りおきけむ白菊を
都忘れと名づくるも憂し

花の名は、この御製に由る。

辞世は、

思いきや雲の上をば余所に見て
真野の入り江に朽ち果てむとは

御遺言により、真野湾を見おろす丘陵で荼毘に付され御印に松と桜が植えられた。「順徳天皇御火葬塚」を「真野御陵」と島人（しまびと）は尊称し松や杉に囲まれた深閑な杜に守られている。

大正五（一九一六）年七月、十五歳の東宮裕仁親王（のちの昭和天皇）は順徳天皇と同じように「恋が浦」に上陸された。伏見宮博恭王、東宮御学問所総裁・東郷平八郎元帥、歴史学者・白鳥庫吉博士らが佐渡行啓にお供していた。その日は、あいにく大雨となったが、多くの島人が皇太子歓待に沸き、通りに出て奉迎していた。その様子を御覧になられた殿下は、人力車の幌を外すよう指示し、自らも雨に打たれながら沿道に居並ぶ人々に会釈をして応じたという。

昭和三十九（一九六四）年六月、昭和天皇・皇后両陛下は真野御陵を御参拝された。昭和天皇は御参拝の後、順徳天皇の往時を偲ばれた。

ほととぎすゆふべききつつこの島に
いにしへおもへば胸せまりくる

御参拝の前日、両陛下は八幡の里（ほととぎす啼かずの里）近傍の松林に囲まれた閑静な宿（八幡館）に御宿泊されていた。

余談だが、昭和三十一（一九五六）年、現在の上皇が皇太子時、昭和天皇に佐渡の真野御陵を参拝されることを申し上げると、陛下は「佐渡の人は御陵をとても大切にしているから礼装で参拝されるように」と仰られたため、荷物も多くなりお供の人たちも礼服を着用しなければならないことになった、という。

ところで、第二六代今上天皇の諱（いみな）は「徳仁（なるひと）」である。名付け親は昭和天皇で、初孫に「徳」の字を充てた。諡号（しごう）に「徳」の字を持つ天皇は第八十四代順徳天皇以後ひとりもいない。聖徳太子が制定した冠位十二階の六徳目（徳・仁・礼・義・信・智）の最上位に位置するのが「徳」である。

これも余談になるが、順徳天皇の皇后は立子、五摂家の一角を占める名門、九条家の出身。昭和天皇の生母は貞明皇后・節子で九条家の出身である。

昭和三十九年六月、昭和天皇は佐渡を離れる船上で風が強かったにもかかわらず、おけさ丸の甲板にお出でになられ順徳天皇への「胸せまりくる」思いを再び強くされ、名残惜しむように遠ざかる佐渡の島影を眺めつつ、惜別の御気持ちを詠まれた。

風つよき甲板にして佐渡島に
わかれをしみて立ちつくしたり

「わかれをしみて立ちつくしたり」の句は感涙を誘う。

現在、私は佐渡と東京を行き来して生活しているが、佐渡へ戻るたびに古人（いにしえびと）が遺した歴史を噛締める。御陵の前に額づき松籟に身を委ねていると順徳天皇の御神霊（みたま）が今も風に乗って佐渡の島を彷徨（さまよ）っているような気がする。聡明な昭和天皇は皇室典範の原典となった順徳天皇が著した帝王学の書とも称される『禁秘抄』を熟読されたにちがいない。朝権復興を期し父、後鳥羽上皇と共に鎌倉幕府に対し果敢に戦った順徳天皇、しかし、無惨にも敗れ父よりも遥かに遠い佐渡に流された。島から一歩も出ることなく二十二年の星霜の果て自ら命を絶った。

「胸せまりくる」思いは、昭和天皇の心奥に刻まれていたであろう。昭和天皇・皇后両陛下、上皇・上皇后両陛下、秋篠宮・宮妃両殿下は真野御陵を御参拝されている。「徳」の字の諱を持つ今上陛下は、まだ佐渡の地を踏まれてはいない。

みやびやかなりし帝のみささぎに
御影おもひて山河にぬるる

詩乃武

佐渡高校の後輩の皆さんに

秋里　好美（昭和46年卒）

私は、昭和46年卒業の秋里好美（旧：山地、結婚とともに改名）と申します。2025年3月24日（月）に慶應義塾大学（通信：卒業率は3％）を卒業しました。現在72歳です。

わたしが、なぜ、このような報告をするかといいますと、今、日本や世界を見渡しますと、気が沈み、息苦しくなることが多いです。そのような世の中ですが、勉学を続けていれば、道は開けて人生が豊かになり、楽しくなるということをお伝えしたかったからです。

ほんとうに勉学は楽しいものであり、いくつになっても今の世の中は学びの場があり、ありがたいことです。慶應義塾大学（通信）では80代の人も勉学に励んでいます。そこで私は、この年齢になって、知的で楽しい、とても素敵な仲間たちに出会うことができました。「意志あるところに道は開ける」その事を、佐渡高校の後輩の皆様に知っていただきたくて書きました。私の卒論指導教授はNHKの英語番組で大人気を博した井上逸兵先生。先生のモットーは「楽しく学びましょう」という事で、楽しく卒論を完成することができました。卒論評価はS。総合面接試験評価もSをいただき、これからも頑張ろうという大きな励みになりました。ちょっと宣伝になってしまいますが、ちなみに、井上先生は、現在『いのほた言語学チャンネル』をユーチューブで配信しています。興味ある方はチャンネル登録してお楽しみください。この年齢になって、このような経験をすることができたのも、英語の勉強を頑張ってきたからです。私は40代で文部省認定実用英語技能検定一級（当時は文部省）に合格してから英語にますます興味が湧いてきて、ついに、慶應義塾大学で学ぶというとてつもなく素晴らしい機会に恵まれました。人生は本当に大変なことばかりですが、そのつらいことを乗り越えるためには、一つでもよいので、興味のあることを追求し、学び続けて欲しいと思います。それが、人生に豊かな彩を与えて、困難を乗り越える大きな力を与えてくれます。また、一つのことを掘り下げていくと、別の方面に思わぬ波及をして、楽しくて、新しい展開を見る場合があります。私の場合は、読売新聞や産経新聞にエッセーを投稿して掲載されるという想像もしなかったことが起きました。私の名前をPCで検索しますと、読売や産経に掲載された私のエッセーが出てきますので、もしよろしければお読みください。

佐渡高校の後輩たちが今の私の状況から何かを学び取り、力を得てくれたらうれしいと思い、以上のことを書かせていただきました。佐渡高校の在校生、卒業生たちのますますのご発展をお祈り申し上げます。

俳句の夢

赤塚五行（駿河守、昭和44年卒）

六月二十五日に放送の「ザ・穴場ツアー」の冒頭にちょこっと出演しました。この番組はNHKとケーブルテレビの共同企画で、お笑いコンビのU字工事さんが全国各地の穴場を、地域テレビ局のアナウンサーと一緒に探し巡る番組です。私はサドテレビの「文芸教室」俳句の選者を何十年もやっていまして、その収録中にU字工事さんが登場するところからこの番組は始まりました。

サドテレビの宍戸アナに「五行先生の全国デビューですね」と言われましたが、実は三十年ほど前にNHK「俳句王国」に出演しており、デビュー済みでした。「俳句王国」は中央の俳句の先生が地方の俳人と吟行して句会をする番組で、私の時は俳誌「圭」主宰の津田清子先生、アニマル浜口さん、角川賞作家の若井新一先生らがおられました。司会は現在「滑稽俳句」を提唱されている八木健さんで、その番組の中で八木さんから「赤塚さんは俳句の夢があるそうですが」と質問されて、「佐渡を俳句の盛んな島に　佐渡俳句村を作りたいです」と答えたのを今でも覚えています。

さて昨年十月、佐渡市出身者ら佐渡にゆかりのある百人以上の寄稿を纏めた『佐渡島「新創造」へ！』が刊行されました。両津出身で東京新潟県人会名誉会長の平辰さんが発行人です。私は山本修巳先生（昭和三十二年卒）の句集について文章を書いたのですが、それがなんと序章に載り、出版祝賀会では壇上で鏡開きをさせていただきました。佐渡出身のいろいろな人に出会えた素晴らしい一時でした。

私の主催している季刊『朱鷺』も六月に六十五号を発行しました。北海道から九州まで会員がいます。島内では四地区で毎月賑やかに句会を開いています。鼓童研修所ではもう二十五年も年四回俳句講座を行っています。ときわ荘や鷺崎地区などでも四季に合わせて句会をしています。新潟日報佐渡版の俳句選者もしていますが、県内の他の地方版には文芸欄が無く、「佐渡は文芸が盛んで羨ましい」と言われます。

この七月には横浜の俳句グループ十一名が佐渡吟行に来られます。『朱鷺』の会員も参加して句会をし懇親を深める予定です。

「佐渡俳句村」構想も少しずつ発展しています。今の私の夢は、母校佐渡高校の文芸部（私は三年間文芸部と新聞委員会在籍でした）が「俳句甲子園」に参加することです。

NHK「俳句王国」に出演した若き日。（左よりアニマル浜口さん、津田清子先生、筆者）

夢路

赤塚五行

初朱鷺の天女の舞ひをふたり占め
雪割草世界遺産を祈りけり
享保の刻が流れて雛の間
鳥からも愛されたきひ日愛鳥日
萱草や老い楽しむ岬の人
鳥森に魚海に寝て夜の秋
柿椀いでふるさとの山軽くする
わが佐渡は不沈空母よ冬温し
柚子湯出て孫うまさうな匂ひかな
愛の形に白鳥は睦みをり
初夢の卑弥呼のひざやはらかし
あなこんだ胴体だけの賀状かな
ふるさとは火をたやさずに大どんど
春愁や手ぶらに鳩や鯉が来て

竹久夢二伊香保記念館

春の森夢路をたどるオルゴール
黒船屋の絵から抜け出て恋の猫
石段に伊香保の春を振り返る
桟橋はマドロス気分夏かもめ
峰雲へ水中翼が波を切る
白鯨のやうなフェリーや夏岬

第46回北帰会総会

日頃は北帰会に格別のお引き立てをいただき、ありがたく御礼申し上げます。

過日、2月11日（火・祝）は、第46回の北帰会総会に引野副会長にご臨席いただきありがとうございました。

当日は、今年最大級の寒波と連日の豪雪で交通機関の運行状況は心配される中でしたが、母校同窓会本部より引野副会長、関西支部より中村事務局長、静岡支部より高津事務局長のご来賓をお迎えし、北帰会会員7名を加えた総勢10名で総会を開催することができました。

名古屋も余寒なお厳しき中、ご参加いただいたご来賓の皆様、また、会員の皆様には本当に感謝申し上げます。総会はご来賓の皆様を囲んで例年通り母校の思い出や佐渡話題、また、ご出席の皆様の近況報告に盛り上がり、時のたつのも忘れ楽しい一日となりました。

中部支部支部長　石塚　享二
事務局　渡邉　拓人

38年卒　同期の皆様へ

若林　光伸（昭和38年卒）

こんにちは！

過去の安福（あんぷく）こと若林です。みなさん、昨年一年間お変わりありませんでしたか？八十歳の領域に入り、なにかと気ぜわしい毎日を過ごしていませんか？私は、昨年は病院通いの一年だったようで、楽しいことはこれっぽっちもなかったように思います。

思い返せば、一昨年の寄稿文に記した右足首の骨折の余震が未だに続き、加えて新たな障害が積雪のごとく幾重にも重なり、雪崩のごとく今週、来週、再来週といった具合の病院通いを経験させられました。極め付きは神経内科でのMRI検査、結果が吉と出るか凶と出るか、報告は次回に・・・

悲しい話題になりますが、ポン友の他界について記します。

彼は私とは反対の性格。気は優しく、お人好し、自分より相手を優先するタイプ。ジオパーク等数々の仕事を引き受け、多忙な毎日を送っておりました。私との関係は、パソコンの管理を引き受けてくれ、私にとっては重宝な存在でした。彼の誘いで「社団法人・にいがた緑の百年物語」に席を置き、県下に七団体ある下部組織のうち「佐渡地域緑化推進連絡会」の会長職を数年間務めさせてもらいました。

その彼が、七十九歳のとき「八十歳になったら同級会をやろうよ」と云ってきましたので分かったと返事をし、果たしてどんな顔が何人集まるかなどの妄想を楽しんでいたところ、その口も乾かぬうちに「癌が見つかった」とのこと。「すぐ紹介状を書いてもらい、ガンセンターでの手術を」と説いたところ「大学の指導で抗癌剤対応をすることにした」とのこと。薬剤対応？わが愛妻のときを思い出してしまい、入院中にその悲報を知らされた次第です。忙しすぎて自身の体調管理ができなかったのか思いを募らせています。

同期のみなさんは健康体でしょうか？この齢になるとどこかしこ異常を感じるようになりますが、その時は直ちにDrのお世話になることを勧めます。そして、なんとか八十三歳の、次に八十五歳の関所を揃ってクリアしませんか！といっている本人が一番危ないのですが・・・

話題を替えます。もう数十年続けている「若林運動教室」。最初の頃は運動不足のかあちゃん、とうちゃん達のためにと考え、そして惚け防止のコミュニティの場として活動してきました。過去には短期間ですが相川から二名、新穂からも三名の参加者がありました。夜の八時から九時半までの間、夕食が終わり血糖値の上がった頃の筋トレ。腹筋だけでも五種類。今は常時二十名前後のおばちゃん達が頑張っています。平均年齢は七十四歳。今回からは私もお歳と云う理由で十一月から二月までの冬期間は休みにしてもらい、毎週金曜日と云うことで三月の十四日から再開しました。思うに、これまではボランティアの指導員のつもりがこのお歳。気が付けば、自分も惚け防止の一員となって頑張っていると云う次第です。何とま～のため息がでます・・・すっかり衰えました。

以上、今年の報告を終わります。

維持会費納入者一覧表

【職員等】 荒木美紀子 桑原俊恵 熊倉正則 荒川吾朗 土屋権市 大矢哲 田中尚夫 田中伸子 坂下文麿 須田傳一郎 小野修三 高橋賢政 宮崎隆一 片山達雄 小杉榮一 石塚透 渡辺剛 金子峰 本間妙子 【昭17卒】 本間悦太郎 尾崎サチ 【昭18卒】 中川ヤヱ 中山壮平 【昭19卒】 歌昭美 猪股チセ 宇治陽子 【昭20卒】 明山君子 大塚ヨシミ 赤沼テル子 本間昭子 【昭21卒】 山口弘人 戸田セツ子 松田寛子 北見節子 福士薫 片山はるみ 【昭22卒】 蔵田昭雄 鈴木浄晥 土屋郁男 中川信子 平沢睦子 風間愛子 吉原豊子 【昭23卒】 宇貝昭午 佐々木典三 風間昭朗 渡辺正之 馬嶋ハルヨ 深野英子 山本敦子 桃井アイ子 本間理智子 三浦久子 村山妙子 花角ヒサ美 菊池ノブ 本間安 大平トシ 鈴木律子 川本陽子

【昭24卒】 井上良一 瓜林照夫 野沢孝夫 中山洋子 中村時子 石川アヤ子 松沢トシヱ 【昭25卒】 中村正寛 長嶋保夫 藤村九二夫 岩田ムツ 青野幸子 湯田サダ 金子俊二 【昭26卒】 石川天瓦 市橋嘉作 川辺武司 高津隆司 武井淳治 土屋忠義 中堀宏 野々聡 本間弘美 三浦東也 西村ミサオ 石塚方子 妹尾茂子 金井比佐 計良八重 山本和江 池田好子 本間セツ子 戸田智恵子 町田育代 【昭27卒】 本多マサ子 安達洋司 飯田信雄 生田文雄 掃部利久 菊池義昭 菊池慶喜 高野保男 中村久樹 中川与三郎 中村正義 羽豆孟 本間照 本間実 本間亮一 渡辺英夫 濱辺三枝 永野美智子 平岡ヨウ 羽藤峯子 長屋トミ子 石塚サワ 平田美恵 鈴木満佐子 朝妻アツ子 服部美穂子 浦本洋子 山崎晶子 【昭28卒】 安藤暢男 今村哲

岡固亨 源田衛 小林加悦 近藤勉 渋谷和朗 信田貞雄 曽我伝一 中川道郎 本間正康 本間真澈 摩尼久晴 矢田有年 山田淳二 山本研 土屋淑子 臼木淑子 伊藤タネ 帯刀美代子 山口久枝 関敏子 田中映子 本間真佐子 田端光枝 逸見節子 後藤トシ 山本ヒサ 本間潤子 後藤禮子 生田伸 酒井マリ 田村安子 【昭29卒】 本間ミチ子 石川義成 海老名俊則 大場俊一 金子重之介 川村昇 小島宏元 佐々木誠一 斉藤己三郎 齊藤勲 静間和憲 嶋倉一郎 中川隆 中村英朗 中村幸雄 山崎充行 藤村英明 豊原久夫 本間久嘉 松木伸夫 松本龍人 向島達 石井キミ子 桜井紀子 井出敦子 小池勢津子 近藤美重子 羽入初代 前畠愛 大畠和子 平田弘子 大西千世 関向綾子 日野房枝 小田艶子 中川弘子 斎藤夏子

本間スズ子 天池範夫 江部冴子 【昭30卒】 石塚昭 金子芳雄 木村英太郎 久保出男 後藤昭 真藤達彦 塚本利三郎 中山猛 西山良太 仲村哲夫 舟崎清一朗 本間繁富 本間武男 本間璉 本間直紀 本間正晴 摩尼義晴 齊藤文雄 村中治一 桃井幸定 森平敏夫 矢田富雄 吉田好昭 渡部敏英 伊藤加奈子 平片知恵子 清水薫 飛田桂子 大久セツ 本間須恵美 相田萬代子 本間富美子 本間祥 羽生丈子 石塚敏子 高橋道子 五十嵐美智子 野村アサ子 荒井春枝 本間フミ子 林サヨ 鈴木美紗子 林美知子 藤原綾子 矢田光子 佐々木昌子 鈴木ミノル 大橋敏江 深沢サヨ子 児玉辰雄 安藤弘美 【昭31卒】 相田栄一郎 天澤己津次 安藤寿彦 渡辺芳伸 伊藤信三 和泉貞次 市橋英徹 稲葉哲栄 大滝與哉 計良芳英 笠井清志 梶田計嘉 金子邦朗

神蔵正巳 川島敏秀 斎藤昭英 菊地豊 北見守 駒形勝也 近藤太和 柴田芳夫 首藤茂 須田清志 末武久雄 田中足穂 土屋三雄 土屋之男 中川洋祐 永井清 永井俊作 仲川八洲雄 半田彰 福田哲也 古屋清 本間栄三郎 本間和明 濱口剛 本間徹 本間義完 間島和之 松本秀邦 村井巌 鶴間俊博 安田吉延 山郷富司 山城一雄 若林昭男 若林達雄 水落重弐 渡辺達男 渡部清 高島節子 村田晶子 臼杵美笠 城野政子 松永ケイ 中川佐保子 須藤タヱ子 市橋日出子 早野睦子 藤村さな江 田中才子 高津恭子 新田映子 佐藤政子 中野シヤチ 原田郁子 中野晴代 谷川邦子 齋藤順子 金井恭子 早瀬絢子 坂口成子 矢崎マサ子 山本ミチ子 梅田滋子 山口洋美 斉藤絹恵 荒井道枝 【昭32卒】 勝木田博人 斉藤哲久

高野孝 安藤卓也 仲川末雄 伊藤恒昭 石塚富士郎 板倉登 市山征紀 風間秀夫 金子信雄 金子均 金沢正浩 唐崎清一郎 祝喜久夫 富沢健三 中川隆二郎 佐々木学 佐々木三良 斎藤忠之 坂田正通 作間良夫 清水登 柴山秀樹 小島明徳 杉本孝也 高津桂 土屋嗣雄 霍間厚英 寺尾和弥 中川哲昌 東山隆彦 平田英毅 本間忠義 本間精一 松川文雄 松中英忠 村田勝 元田利夫 森幾 山本茂夫 山本忠行 吉田敏雄 渡部修二 山本八千代 江口悦子 平井寿美子 酒井文代 鈴木桂子 市橋英子 山之内信子 溝田幸子 柴田艶子 飯田茉利子 高橋隆子 斉藤桂子 【昭33卒】 新田政太郎 石塚友一 青柳寧識 石川晴彦 石塚功 市橋鶴男 大場和範 笠木一孝 梅田信雄 菊地敬司 菊地亨 北見昭治 計良金吾 斎藤晴実 坂野俊夫 清水幸治 真藤紀元 清田文武 高野宏二郎

高橋唱平 大井秀行 中井泉 中川喜三郎 中川宏 中川元宣 中山専蔵 仲川一秋 長嶋睦雄 羽豆光治 畠山諭 林孝則 平下俊六 藤木康夫 逸見正平 本間達也 本間博 本間満 益田富士雄 松田道雄 安田伊佐雄 柳信治 山口謙一郎 若林照二 渡辺秀雄 生井美弥子 斎藤春江 安藤瑞恵 大森光子 相川キミ 石塚ルリ子 長谷川桂子 若林明子 平山トモ子 桜井昌子 川島悠紀子 作田淑子 宮川美千子 加藤郁江 杉田美代恵 青木征子 榎本道子 磯山ヒサコ 飯田ヨシ子 龍崎美恵子 川原勇 西村玲子 【昭34卒】 本多敏昭 宮田功之助 伊賀伸次 石川芳彰 石原照久 上杉光彌 大平精一 小田健次郎 加藤進 梶田忠温 金子汎 梶浦弘明 金山教政 川上龍雄 川辺勝義 計良武彦 小林秀雄 小林博 小松茂 児玉静夫 近藤秀春 佐々木信一 鈴木新正 須田巌 須田健一 田崎昭夫

田中次英 高野三郎 丹下正 土屋眞人 土屋満春 鳥井啓二 名畑宏司 中川友雄 中川雅晴 仲川新三 野田健 兵庫輝久 平腰忍 逸見静夫 逸見真三 本間勲 本間猛 山本澄 若林求 渡邉正孝 久保井育子 宮本二三子 木村明之 河野千尋 高野八潮 秋本起代子 桃井宏子 浜口ミズホ 羽二生ミヨ 堀部知子 内田ハルミ 中川明子 萩原礼子 本間博子 伊藤悦子 松中芳子 斎藤法子 田中秀子 久村久実子 石見牧子 平田優子 畑ヶ谷真澄 野沢方子 阿部由美子 丸山久野 渡辺元子 竹内佐紀子 新保美春 臼木美智子 木村英子 秋野節子 安達三樹子 高野栄子 山本久美栄 仲村照子 【昭35卒】 大場弘志 羽生茂 伊里信行 石原哲夫 伊藤窯一 伊藤龍太郎 飯田修 渡邉道夫 石井芳太郎 市橋成生 岩崎輝夫 岩城昭人 海老名嘉一 遠藤忠男 大木戸恭一 梶田一夫 風間興司 金子億夫

金子養正 木村研志 菊池明夫 清田恵 佐々木充 佐々木康孝 齋藤暹 正司謙 末武小弥太 田中正晴 高野亮司 名畑五郎 長原幹 松尾勲 関川敏晴 平田勝英 星野一丸 山田誠 本間篤 本間邦夫 本間貞男 本間純一 本間政則 丸山英夫 山田勝利 山地一夫 渡辺浩一 渡邉剛忠 青柳純子 藤原好美 小原沢厚子 岡野恵子 海老名順子 大木ケイ子 横山誠子 福田陽子 玉木冷子 真木山裕美子 後藤安子 風間一子 石塚多恵子 飯田寿美子 本間啓子 渡部セツ 本間春美 倉田史子 近藤三和子 飯野恵美子 池淵弘子 本間美佐子 水野ハルノ 林治代 桑原洋子 佐々木ミヨ子 兵庫晴美 【昭36卒】 宇治達実 相田博道 青木昭人 青柳禎一 伊藤正範 石井保範 猪股俊雄 山岸正石 臼杵克身 海老名武英 榎章郎 小田俊幸 山根史 金子嘉通 川上昭博 川上一也 河原幹雄 菊池祐次

外山圭介 北見翼 碁石学 佐藤敏一 笹本正司 鈴木弘 関川宣義 関口清剛 望月俊夫 間嶋浩二郎 高橋敏彦 高橋光晴 中川毅 中村正臣 仲村幸雄 仲村征司 西川祐一 野崎南雄 萩原昌一 野崎邦勝 平岡信之 藤木篤典 本間國郎 本間邦彦 本間幸次 本間道夫 松井重夫 三亀秀夫 谷地平八郎 山下英俊 山田浩 山田稔 山本顕男 渡辺正之 渡辺弥 斎藤佳子 伊里千恵子 小林尚子 松橋久枝 梅村祐子 川上重乃 大地智美 多田小波 窪田和子 影山光枝 本間ムツ子 上林アイ 高野千恵子 金田トシ子 中村芳子 寺林美智子 八田礼 仲川文子 反町和子 山崎信子 三井あき子 加藤操 秋山マチ 佐藤正代 竹本正子 中川和子 平岡昭子 柴坂春夫 渡辺ミチエ 野口英子 【昭37卒】 金子陽一郎 伊藤日出海 伊藤雅浩 池田勇一 石崎常臣 石橋嘉一郎 市橋宣徹 上杉俊孝

植田日出夫 榎谷端忠 長部憲忠 松井正明 細川誠 金子竹男 金子忠 金子正勝 金子正義 金子怜三 鎌形満 亀田省三郎 川上正春 川上正晴 萩山武敏 菊池三男 駒形芳三 佐々木孝一 斉藤克義 斉藤公男 斎藤衛 雑賀大介 清水千丈 田中正則 高下純夫 高野宏二郎 土屋純一 寺尾弥 戸田正之 中村龍人 中山寛文 山本正治 本間五郎 本間瑛 本間正宣 本間勝 本間敬之 本間裕 深山礼孝 村川四郎 沖野谷徹 桃井宏征 神蔵勝雄 山中武久 山本敬二 山本勤 渡辺征二郎 渡辺佳照 青木尚子 小林多津美 河内須美子 石井洋子 石井洋子 金子サトミ 佐藤セツ 関口千鶴 斎藤百枝 小別富美子 中條弘子 近辻道子 竪野よし子 鈴木美代子 山崎好江 井梅佳子 宮沢暸子 古御堂スエノ 金子誠子 近藤キヨ子 河原和子 引野美耶子 榎頼子 熊谷一枝 柘植陽子 畠山輝子

加藤紀美子 中野栄子 谷本満枝 川原房江 後藤靖子 佐藤明子 【昭38卒】 後藤紀子 銅郁夫 浅島誠 若林光伸 伊藤邦弘 伊藤寿彦 伊藤嘉足 石塚慎次 岩見明夫 上杉国武 臼木正男 遠藤克彦 岡崎信 金子正夫 樺島史朗 林七司 菊池勝也 信田勲 轡田文紘 古屋野和三 近藤榮昭 佐々木悟 佐々木良文 藤原博 須田弘 河原三喜男 末武敬晴 田中輝明 高津道夫 高野昇 髙野泰三郎 知本修之輔 霍間敦 土屋浩二郎 寺尾六次 冨永儀和 中川久男 中川均 中村守 西崎明伸 畠山茂樹 服部達則 逸見安正 本間功 本間隆夫 本間忠三郎 山本雅雄 村川俊彦 若林治尚 渡辺建夫 渡辺朝子 佐藤順子 屋敷幸子 石岡好美 広瀬典子 高橋典子 池牧子 斎藤イツエ 岩本二三四 樋口俊美 鷹野ヤヱ 戸田美紗恵 中澤淳子 阿部史子 小田郁子 桑原武子 中元瑛子

渡辺暁子 千葉祥子 金澤野里子 本田町子 冨増幸子 中条寿子 児玉美津子 本間絢子 盛岡慶子 山本妙子 阿部智子 川田初子 渡辺丸子 佐藤雅子 小林栄子 若林サカエ 北見孝子 本間マサヱ 宇佐見カナエ 笠井ヤヨイ 羽二生ヌヒ 工藤ミエ子 林和子 小菅英二 佐藤洋子 【昭39卒】 斎藤勝美 天池忠義 池克巳 池田峰雄 石塚重康 丹藤和彦 臼杵年正 榎田繁雄 大木戸研二 廣橋光治 掃部義幸 梶井正之 川島淳二 計良実 小林巳癸彦 後藤雅之 佐々木伸一郎 斎藤正 櫻井直也 酒井源次 吉田康夫 須藤健一 末武三男二 杉本孝弘 杉本正男 関川敬義 高野正之 津端聖美 鳥井四郎 仲川恭司 長嶋建之 羽入正路 平野政治 福田欣一 古屋武 星野猛 本間明生 本間巌夫 本間克彦 松井要司 宮田亮平 山口保 山田暉夫 和田亨 渡辺誠二 渡辺孝行 渡辺兵三郎 本多ヒデ子

中川智美 井上淑子 伊藤裕子 宮本貞子 西川紀子 武田マサ子 三木敬子 尾畑サカヱ 渡辺幸代 村川明子 土屋道代 中村圭子 柴田フジ子 木村敏子 山田光世 渡辺愛子 林部歌子 小田静江 佐藤瑞枝 吉澤里未 佐々木かず子 三国雅子 鬼頭三枝子 渡辺ヨシ子 中野芳子 小川耐子 高橋千春 大平迪子 渡辺宏子 山田規矩子 小野喜実子 間島登志子 正本陽子 熊木徳子 本多康雄 本間淑人 永田敦子 【昭40卒】 阿田原輝明 相田雅夫 浅嶋義之 和泉徹 飯田洪平 池登志邦 石井美明 石川敏彦 石塚康昭 石塚豊 石橋博 内堀順二 瓜林正博 尾潟正浩 粕谷賢市 影向範昭 菊地昇 古屋野英夫 廣満修 斎藤泰義 齋藤芳雄 高下章 高野洋二 高野嘉巳 高橋稔 竹田新太郎 谷川季男 弾正俊一 中川悦郎 中川和夫 中川伸治 中村幸雄 長嶋敬吉 野口民夫 伴蔵泰市 細野正道

佐々木克昭 本間勝雄 本間敏史 本間雅裕 本間瞭一 前岡寛 八木洋 山崎弥代一 若林信正 渡辺敏夫 渡辺博之 豊島美代志 金子恵美子 柳内美智子 藤井貴子 土屋節子 土屋英子 石栗綾子 丸岡杏子 坂上素子 松本陽子 丸由美子 高杉廣子 佐々木孝枝 北川淳子 斎藤和子 藤田チズ子 荒木政子 田中里見 荒井敏子 丸山ミサエ 小林一美 渋木玲子 土屋明子 塙ミエ子 鶴間美和子 角田芙佐子 中山ミナ子 宮島妙子 島田涼乃 土田孝子 中川絹代 小林斐佐 山田セイ子 吉原美枝子 佐野裕子 浜登敦子 大西薫 江丸美子 櫻村トシエ 【昭41卒】 江添岩雄 野崎敏男 井上正夫 池田亨三 池田俊晴 池田宏 石塚亨二 榎本民雄 磯野利彦 市橋昇 稲村三夫 猪股文彦 茨城牧人 小田雅道 野澤喜作 近江和芳 大場憲栄 柏倉淳一 金森大藏 川上敏春 菊地孝 菊地正憲 北嶋准

清田秀一 熊谷秀夫 島宗善英 近藤敏明 近藤利弘 近藤憲雄 権代長比古 佐々木和則 佐々木正充 佐藤久雄 小路久徹 末武正義 関口之一 土屋久雄 辻二郎 名畑二三一 中川清 中川登規彦 中川博 中村明夫 中山秀英 長登敏朗 西埜覚 西村進 林純二 佐野由則 堀正美 堀口喜男 本田亘 本多繁則 本間清史 山本三郎 本間忠夫 本間敏雄 本間道雄 山崎泰 松田友之 丸山茂樹 三浦正明 宮川安則 村川勉 山崎徳行 山田秋男 滝沢優 水野正子 杉山洋子 河合真理子 堂地美恵子 都竹清子 篠原裕子 永瀬タカ子 榎直子 仁神康子 渋谷和子 秋元玲子 古賀洋子 吉良明子 遠藤智恵子 片桐勝子 小山喜代子 八木マチ子 後藤清子 祝政子 柳みつえ 齊藤真智子 長岡朱実 萩原照子 権代せい子 立壁邦子 斉藤美恵子 吉田伸子 才川弘美 鈴木幸枝 中川良子

鈴木富美江 中村和子 永井久美子 前澤由美子 服部句美子 児玉タエ子 本間一恵 林恵子 本間シヅ 笠井智恵子 北見千香子 石井永子 引野マサエ 加藤ミナ子 本間澪子 松井夫佐子 山本郁 山本泰子 江口近子 渡部稚子 中川芳美 岸野久美 川嶋雪江 佐藤弘子 富田ふみ子 鈴木秀子 山内典子 飯田治美 本間由紀子 斎藤良子 鈴木静子 権田女里子 三木カツ子 青笹麗子 【昭42卒】 青木徹 荒木久夫 安藤康裕 井所五市 伊藤潔 飯田三郎 池田誠 石井秀明 石塚由成 石原敏孝 市橋久生 海老名茂 中返信洋 大崎直樹 岡田庸一 奥村一幸 梶原道雄 片山良博 川井廣吉 川島育英 川嶋洋一 川原憲人 河原勝 川上治 木村和彦 菊池悟 菊地正晴 熊谷正美 児玉省二 児玉良和 河野清一 近藤光信 佐々木壽之 佐藤洋一 坂上登三雄 鈴木信司 隅田光夫 田尻正記 多田重孝

髙野一久 高橋元昭 武部吉博 近田東一 土屋好雄 外内幹寛 後藤則行 小島富雄 葉梨誠 萩田由之 半田廣 藤井博 逸見芳郎 松井壮七 光谷俊幸 森川十正 谷地田雅将 米津茂 渡辺勇 渡辺正晶 渡部至 田中静子 有田ちず子 小山八百子 宮沢越美 武田さち江 仲川二三 大谷敏枝 岩原幸子 加藤恭子 中西明子 大江和子 内木和代 知念由美子 逸見真由美 板垣恵子 錦織博子 長岡芳子 西郷ゆみ子 中川京子 樋口由美子 曽我律子 本田美恵子 佐野恵美子 榎有子 森まさ子 金子和子 池田一枝 中返フジエ 山田イツ 小林滝子 藤井フサ子 中川八千代 萩田章子 臼木栄子 大沢美千子 林泰子 土屋千恵子 清水公子 高津恵子 山本澄子 本間恭子 本間里子 平賀久江 野田智子 水上あつ子 矢代春美 山田正子 中川良子 松島みえ子 宮坂美江 佐藤秀子 江村ミチエ 町野三榮子

榎本祥子 【昭43卒】 岡固謙司 須田義孝 相田武康 荒井文明 飯田敏夫 石塚三夫 猪股泰正 岩崎治光 岩見勉 臼杵敏夫 内堀徹 海老名次夫 小田一均 笠井誠一 片岡一英 金子亨 川嶋良夫 川辺文博 菊池健一 久保雅博 崩賢司 小池正容 小澤口治樹 古藤雅俊 近藤昭夫 本間明 佐久間洋一 斎数吉昭 斎藤五十雄 斎藤英夫 笹山猛夫 清水俊英 須田均 増家裕幸 田村昭博 高野清三 関川吉明 辻幹雄 土屋賢 中川和徳 中川精二 藤澤正 中川恒男 永田治人 仲川進 仲田善夫 長嶋俊介 長嶋良夫 高橋敏一 畠山直樹 浜本和幸 福井幸雄 堀川雅道 本間清二 本間春雄 本間衛 本間吉一 松村学 山田典一 吉田和清 若林正吉 渡辺拓人 渡辺豊 渡部春樹 池真里子 猪股陽子 安達礼子 石井悦子 中原ハルミ 田原陽子 小松原香夜子 小埜イツ子

矢吹洋子 伊丹ゆき子 関屋幾代 大関早苗 加藤静子 三浦喜美子 小池佐知子 中嶋豊美 後藤美智子 篠川重実 関川典子 高崎かづみ 梶原清子 高橋直子 中川らん子 小林はるみ 野本朝子 佐近恵美子 岡部美知子 多田悦子 中田直子 森山ひろみ 本間正恵 石田涼子 後藤順子 八木后代 小林サト子 太田千世子 渡辺サト子 横山すみ子 石見晴美 河原久子 小田秀子 新川直美 【昭44卒】 加藤貴一 斉藤久美子 阿久津義三 天沢敬生 伊藤繁 石塚康廣 関根寿生 岩崎慶一 榎修 遠藤芳太郎 小田直樹 織田勝 加藤幸一 金子雅一 金子優 神蔵昇 川原正 木下義昭 北見敏明 計良秀実 鴻江義明 近藤栄一 羽生行雄 佐藤正明 斎藤克美 柴田茂 須田明夫 杉沢良治 赤塚守 清田知見 高野秀樹 土屋雅典 中川健蔵 野口猛 野口雅史 野口道夫 野崎喜一 藤木大豊 藤沢一雄

青野伊佐夫 長谷川輝徹 本間敏市 本間秀樹 本間裕史 本間芳夫 上杉紀一 三田健一 村田慶朗 吉田久人 若林重敬 若林秀世 渡辺義一 渡辺作司 渡辺孝 渡邉博 渡辺正昭 土田まきえ 近藤久美子 菅紀子 矢吹由紀子 須藤千恵子 斎藤ヨネ子 山崎ちゑ子 田中純子 川原啓子 沖内あい子 安部礼子 志賀京子 鈴木真知子 高野喜代子 土屋英子 田中啓子 猪股美代子 久保田里子 細江道子 藤井真弓 本間千恵 本間宣子 土屋秀美 新堀るみ子 諸星孝子 中森けい子 関口紀子 大橋ひろみ 渡部美和子 【昭45卒】 金子博文 藍原重雄 井所政利 伊藤將美 飯島孝晴 池久雄 池野義光 石井孝良 石川秀之 石崎澄夫 市橋英博 猪股邦彦 猪股悌一 岩崎正 岩崎久吉 小田茂達 加藤信之 加藤文男 笠井清通 門口栄 金子明 金子哲夫 木村和夫 児玉功 佐藤隆 斎藤孝夫

斎藤博通 笹本文夫 土屋芳広 浜田達晴 本田耕作 本田忍 本間昭栄 本間貞夫 真後敏也 本間豊 本間芳夫 松山嚴明 村田政久 山川辰也 吉田秀樹 坂手裕子 渡辺啓子 磯西紀美恵 川上るみ 源氏ひろみ 池好子 田中佳子 島川公江 弾正成子 土屋加代子 中川のりこ 小川佐渡子 加藤麻智子 本間芳美 三浦昌代 田中倫子 古屋紀子 金子のぶ子 進藤千栄子 矢口逸子 中村聡子 斎藤芳子 丹下清子 殿内裕子 岡部静枝 【昭46卒】 中原ニヨシ 伊藤達也 伊豆野尚 池野正晴 石井哲彰 石黒国雄 岩崎紀彦 岩野弘 岩見良二 打木辰巳 金子英夫 金森宏三 川上雅由 菊地信弘 北見康雄 草木重光 源氏達也 小出隆一 近藤秀策 斎藤明雄 斎藤本恭 坂下裕明 渋谷久雄 羽豆正 白川隆夫 新畑章一 関口圭一 田中芳晴 高橋喜久雄 須田秀昭 辻政之 内藤稔 中川昭治

中川昇 長原巳智夫 西崎正好 日野尾達夫 平間俊雄 藤井茂 古川勲 本間一春 本間望 本間初一 光村克己 矢田親成 山本務 山本秀雄 松田文苗 渡辺廣道 渡辺浩行 渡部義雄 近松恵美子 大橋真理子 小山田恒子 高嶋定子 長田乃扶 梶井裕子 檜田睦 伊藤町子 芝池日女子 計良智子 計良ミハル 渡辺日出子 明楽幸栄 大崎留美子 杉山利子 斉藤寿子 佐野典子 高橋良子 矢島陽子 渡辺八枝子 本間三千代 田所文代 本間由美子 碓井幸代 後藤由香里 若林通子 秋里好美 【昭47卒】 本間順一 長嶋友子 藍原正 石川健次 伊藤政巳 池田秀範 池野芳樹 石橋悦雄 磯野克也 岩田柳一 宇治顕 臼杵克紀 尾仲博史 大崎正行 大谷営造 岡固正幸 加藤賢二 金岡敏 金子敬二 茅野勝己 川上治美 川崎新吾 菊地健次 久保政信 倉内輝明 小菅直樹 児玉勝巳 河野斉

近藤昇 佐々木辰弥 佐々木秀道 原正秀 佐々木求 西花昭一郎 斎藤重樹 坂上雅弘 笹木俊明 田中延和 土屋邦明 永井弘志 浜田学 藤井栄治 石井浩平 本間琢英 本間悌次 本間芳和 牧野敏夫 松本茂男 丸山員弘 三科武 山田富巳夫 山本陽一 横坂政広 吉田耕二 渡辺和憲 渡辺和英 渡部俊秀 渡部尚 中川奈保子 西巻良子 伊藤恵子 山下英子 神谷千鶴子 日野尾雅子 江花米利子 吉井千里 石見裕子 伴蔵アキエ 坂井節子 近江正子 津田隆子 山田悦子 福田京子 武田かほる 荒木静 戸村美香子 深野由香里 葉梨雪枝 須崎桂子 佐藤智子 【昭48卒】 浜本良一 荒貴源一 井長博昭 和泉義資 石川利之 石塚多加弘 岩見憲治 右近淳一 宇留間和基 大沢達郎 大沢康雄 岡崎拓夫 加藤健 金子道郎 金森賢治 神蔵俊一 神蔵準一郎 小島秀樹 佐々木啓夫 斎藤寿紀 齋藤直己

坂井栄一 嶋村利明 鈴木和義 高野均 忠平彰 土屋信一郎 中川惣司 中嶋羊一 藤田史郎 中山道夫 逸見唯夫 本間健治 本間孝之 本間健人 本間則昭 計良正昭 山本秀昭 若林栄次郎 渡辺健二郎 渡邊正弘 渡部春也 加藤節 小川ひとみ 中川明子 室井恭子 町田よし子 本江奈代 鈴木市子 海北奈智子 本間京子 森山紅子 森いずみ 白井智子 計良久美子 岡崎一美 森田美恵子 【昭49卒】 池田和博 石塚富二男 臼杵勇人 遠藤久昭 小田浩 金子春人 川中明夫 川端茂一 木下邦春 木村和夫 菊池義晴 中村満 児玉宏之 佐々木秀樹 斎藤勝 齊藤俊宏 白川弘二 末武洋 鈴木雅彦 関口光男 田中邦明 高野充 竹田裕 谷口明彦 土屋克彦 土屋正博 豊木博泰 長嶋健輔 野崎政明 浜野整 浅香昭二 細川幸男 本間琢治 本間弘之 水上博雄 桃井正典 山内修

山岸善晴 山口和一 山田民郎 渡部博 田平里美 上濱洋子 村田裕子 金子郁子 竹川伊都子 高野悦子 大間多恵子 石川まさえ 北村聖子 清水ひとみ 片山京子 寺田美由記 土屋三千代 若杉新子 高橋多恵子 中川里子 西沢裕子 本田厚子 島恵美子 堂前みどり 松村由利子 宮川幸子 名取早苗 白川美智恵 渡辺雅子 【昭50卒】 小野文男 井上一美 浅川初志 伊藤広幸 伊藤文良 飯平喜文 生田均 石塚憲夫 石船孝夫 茨城久一郎 馬道哲 岡崎大治 柏原一彦 金田稔 菊池芳樹 菊地誠 北村議見 桑原寛行 小浜利雄 斎藤哲二郎 中川康夫 田中湖雄 知本敏郎 中川毅 中静満博 長澤栄吉 二敷正人 畑中将彦 深野俊之 本間俊一郎 本間雅志 本間優 三浦基裕 三浦良廣 山岡秀樹 山田亮一 山本篤 渡辺勉 渡辺靖 松井真澄 吉田美都子 寺田紀子 木村秀子 中村亜佐子

本間友子 小浜庸子 中村智子 藤村亜紀子 青木百合子 増田広子 【昭51卒】 天沢正規 本間精治 石塚一浩 市橋敏裕 猪股克彦 風間成範 武井千秋 金子英弥 河原森久 木村元 木村広幸 菊池健 熊谷寿雄 計良紀昭 小杉久志 小林泰英 小山逸郎 佐々木史郎 斎数正晴 坂口法久 塩釜一公 信田庸二 高野智哉 高松登 土屋和也 土屋俊洋 土屋浩 土居原潔 仲川邦夫 羽二生裕 塙佐敏 林雅弘 渡辺克則 本間克久 本間亨 大塚伸夫 目黒康裕 安田昭二 山岸誠一 山際宏志 渡部泰治 坂上典子 藤田節子 加藤康子 吉野あつ子 本間みどり 嶋川宏子 岡部薫子 五十嵐清美 中村孝子 本間祐子 冨山信子 藤木祐子 海老原智子 小田智子 近澤泉 【昭52卒】 相田勉 猪股慎二 遠藤治 大谷直治 大橋英喜 岡崎実 加藤義孝 金子省吾 菊地傑 北見広史

北村正一 北村議生 計良伸二 佐藤透 椎野公則 信田寿雄 成田豊 羽豆史郎 浜中力也 半田利達 引野健二 平田誠司 広瀬俊三 本多正喜 本間公司 本間正人 松原琢 山地安之 山路善幸 吉田茂夫 堀裕次 渡邉正一 岩崎コズエ 広瀬葉子 山際啓子 金子省子 山岸芳恵 齊藤寿子 田中るり子 計良恵子 亀山俊子 重原令子 松村ユカリ 渡辺亨子 北沢具子 中山久美子 藤間みゆき 西美和子 青木貴美子 松井孝代 【昭53卒】 中川文則 安藤正夫 井上久則 岩崎憲士 岩崎武司 笠木嘉則 金子博之 金田淳一 川上治男 木透一寿 小杉功雄 佐藤和博 景山光也 須田亮 杉坂芳文 隅田俊彦 高野彰 高野庄嗣 小杉満治 土屋義勝 寺島善郎 名古屋瑞穂 岡田和幸 本間一秀 本間正人 山本一 山本義則 阿部恵子 福本めぐみ 原紀子 長谷川透子 遠藤智栄子 関根敬子

菅和枝 小林尚子 高橋尚子 矢島祐子 佐野朋子 天野崇子 山田裕子 齋藤明美 植井雅子 岡田裕子 黒島幸代 中川育子 猪股晶子 可児久代 磯部恵美子 清水裕美子 林浩子 土屋美代子 有馬時子 高松房子 畑中里美 本間純子 高橋美由紀 住川敦子 渡辺倫子 【昭54卒】 大地求 岩崎和広 秋山和明 猪羽浩幸 猪股真純 内田喜之 太田真明 北見信浩 熊谷隆一郎 小杉比登志 近藤浩太郎 笹井浩 清水幹明 白髭浩昭 城塚敏道 新発田靖 鈴木忠 土屋吉晴 中司敦 中村信彦 中山保彦 野澤俊也 藤森勝也 本間和幸 本間康博 前田俊一 三浦一富 今井勇雄 山本一成 山本久 渡辺哲雄 渡辺俊行 山口明美 岩脇里絵子 荒川益美 小杉玲子 栗原美枝子 吉田浩子 近藤縁 須田康江 大花好美 田澤世津子 近藤信子 板倉真理 渡辺由美子 【昭55卒】 池浩二 板倉隆

大沢正行 児玉悟 田部浩之 高野彰光 鶴間賢治 中川晴義 成田広 羽根芳和 林純一 本間雅浩 本間亘 山本良博 余湖敏弘 脇野哲郎 渡邊晃三 戸川真由美 田中仁美 葛野イツ子 長谷山弘美 静間奈美 首藤雅子 渡部聖子 瀬川正代 ドゥティンガー洋 仲道信子 池良子 金子広子 下野啓子 【昭56卒】 赤石泰男 伊藤重明 伊藤光 伊藤政人 石原義久 市川一之 小田幸範 大屋広幸 岡崎康明 長田和義 親松俊司 川端良徳 川原晴夫 北正伸 小嶽幸一 小山康夫 宇佐見裕司 隅田信弘 高野浩 駄栗毛真 富田龍彦 萩野徳之 畑中耕生 平野学 本間和寿 本間聴 松田稔 村尾直人 深見弘喜 山田裕之 渡部修 石川揚子 渡辺美和子 野上けい子 村川元子 山本陽子 近藤あゆみ 永野ひろみ 山浦智子 中川早苗 飯山久美 安田住子 大平範子 深見聖子 本間睦子

萩尾みゆき 宮川美恵子 山中津久美 【昭57卒】 遠藤由紀夫 笠木聡志 金子稔之 川辺隆夫 中山勝之 後藤浩 嶋田正也 高野徹 津山照光 本間勲 本間悟 森川幸彦 余湖明彦 安藤有希恵 多並真起 今井厚子 宇佐見典江 髙野由加里 長柴裕子 須藤めぐみ 中山恵美子 北見和子 高寺利香子 韮塚敦子 木下直子 隅田斜子 高原佐恵子 【昭58卒】 藍原清巳 宇佐見友教 尾崎正彦 山口正道 後藤康志 佐藤一人 佐藤寿樹 斎藤芳和 静間徹 鈴木啓介 土屋郁剛 戸田幹人 中川勝弘 中村文哉 長島秀樹 野田英樹 濱松岳志 古屋茂人 本間孝史 本間芳之 松井秀樹 村尾智生 村川辰雄 八代等 山崎浩志 山田朋広 渡部顕宏 河村久美子 石見るり子 長倉美賀子 大瀬順子 間島恵子 加藤めぐみ 勝藤文恵 平野富士子 本間江美子 小島明美 土屋諭子 佐橋久美子 【昭59卒】 伊藤一成 岩崎隆一

上川芳浩 須藤史彦 末武良樹 三浦章宏 寺島陽三 外内浩二郎 林隆行 本間信行 本間浩 本間浩人 森川浩行 山本勝司 輪倉由紀夫 脇野真司 内山均 渡部厚史 渡部耕治 本間砂織 平島留美子 金子正枝 本多洋子 石井貴子 岡崎敬子 金子園華 【昭60卒】 安藤博通 内田喜徳 小田成人 小原澤英彰 川端弘一 計良朋尚 田長真 髙野雅巳 長茂一 中川悟 橋本敏郎 濱松智弘 松井徹 山登靖 伊藤佐恵子 儀同里美 久住寿代 原雅子 河治知子 藤井美智子 【昭61卒】 伊藤弘勇 飯田厚 石橋渡 今井茂樹 大井新一 中川順司 金子岳夫 小瀧望 小宮山謙一 児玉二郎 高橋史明 林健司 平田毅之 本間正宏 本間裕 山田惣一郎 浜本きく 市橋裕美 渡辺美智子 岡村かおる 中村裕美 橋口勝代 菊地忠子 春山佐知子 本間智子 本間久恵 山口美菜子

【昭62卒】 浅嶋隆 池田宣史 池田一彦 市野正廣 梶田和明 木村喜一 佐藤好彦 鹿野弘之 土屋嘉広 鳥井俊伸 野口英夫 三浦吉明 渡邉恭一 武井栄 村山久美子 加藤史子 冨澤香津代 河野いずみ 津野友美子 渡辺淳子 野村みか 岩田美智子 【昭63卒】 伊藤靖志 磯部浩之 岩崎資 大林健太 計良英章 後藤修治 田中幸二 田中英明 中川秀太 木村明利 野口幸雄 野崎克裕 本田寿之 本間智英

松本良平 谷地田健治 渡邊和夫 飯森清美 木下久美子 菊地直子 近藤美津子 須藤美津子 田中美紀 猪羽美奈子 梶田典子 本間直子 早川朋美 引野紀子 鈴江留美子 【平1卒】 稲場直人 遠藤芳輝 大桃一浩 風間直之 北見賢一 小宮山澄 末武弘章 鶴間智宏 中川孝嘉 根岸慶久 塙博樹 本間千也 本間賢祐 渡邊直樹 筒井百合江 中浜智子 木村陽子 菊地雅代 菊地美恵子 鳥井貴子 伊藤久代 金子佐代子

田長美和子 【平2卒】 尾畑貴司 大友順 加藤芳宏 金子正博 黒部良一 佐藤渉 内藤哲也 中川高志 中川雅司 野崎睦 保科安志 星野一博 本間悟 本間直樹 真木山八城 森本貴子 五十嵐千代美 児島信子 廣瀬芳恵 白井祐子 中堀良子 石井佳代 藤井智子 【平3卒】 石川一成 岩崎倫卓 大久保省三 大水正行 金子康則 桑原康彰 後藤文洋 中川貴裕 田中友二 堀口健児 本間哲彦 小野啓子

菊地祥子 河野ゆかり 萩田裕巳 伊藤光志 【平4卒】 飯田誠 笠井貴弘 後藤公彦 中川信弘 山田直行 金子幸代 鶴間京子 山中度紀子 【平5卒】 石川一政 市川俊雄 稲葉光昭 金子真人 土賀義幸 椿昌宏 山本和広 田屋美鈴 金子真紀 樋口めぐみ 上山香子 【平6卒】 安藤武宏 金田雅貴 齋数貴典 本間克彦 山田元章 吉田玉輝 鈴木深紀 塙丈昌 信田早苗 計良サユリ 山本実名子 星光代

【平7卒】 岩原正樹 植田鋼司 木村浩久 湖屋博久 酒井紀和 末武正洋 佐々木夏子 大西千鶴 【平8卒】 石川広光 石塚貴晴 伊藤真吾 大崎敬彦 本田朋之 山本一樹 渡部守 飯塚清恵 北村香織 中川文 惣卜満香 【平9卒】 植田雄司 大崎暁彦 岡村陽介 源氏篤史 齊藤俊輔 本間伸彦 松井正郎 山本弘道 菊池直美 中嶋生美 本間江利子 金田紗耶香 渡邊香織 【平10卒】 黒田剛 須田大輔

須田武史 中川森 中森一良 植田芳恵 大嶋美菜子 鶴間利恵 本間いずみ 福山はるな 山本由紀 登石こずえ 【平11卒】 中山秀苗 原田清樹 金子あゆみ 金子早苗 貝沼直美 中川未咲 本間由美 渡邊和代 【平12卒】 金子大輔 北見秀樹 引野忠則 山中彰久 山本郁雄 相良真有美 中川志詠 【平13卒】 川原健 岡崎道太 中嶋貞治 植田領司 野元貴雄 菊地大輔 清田正樹 石塚敏史 菊池奏江 計良和貴子

【平14卒】 大崎邦彦 計良知宗 椎井慎太郎 島川佳奈子 山本昌有 山田茉莉 【平15卒】 加藤一郎 児玉大輔 長崇之 渡部崇 菊池理沙 内野公子 中嶋理美 【平16卒】 加藤信 藤井宏行 岡崎花野 佐藤矩美子 【平17卒】 廣瀬亮平 大崎悠子 首藤寿子 川崎雅代 【平18卒】 石崎超矢 田屋光将 富田匡信 遠見智香 【平19卒】 伊藤真知子 加藤宏子 須藤千晶 【平20卒】 土賀恵心 小田恵華

【平21卒】 岩野力 木透寿生 木村太郎 天澤麻紀 木下由子 村川南帆 【平22卒】 須藤良隆 福井貴大 風間伎穂 川原友佳 工藤麻美 近藤さやか 【平23卒】 塚田恵介 本間新悟 坂上風香 山中なこ 名古屋有紀 【平24卒】 菊池創太 菊地優太 齋藤恭俊 坂口栄樹 清水悠平 地多駿介 長尾和正 中山卓也 林隆介 藤井忍 梶田真里 嶋田菜奈子 本間寛子 山岸友実 【平25卒】 鈴木峻太郎 山中雄太

川原麻佳 早川桂 【平26卒】 静間勇人 矢田尚人 木下結貴乃 林香菜子 【平27卒】 梶田樹生 藤井伸行 伊藤紗吏 鈴木香里 本田秀美 村川楓 【平28卒】 谷川洋介 矢田岳琉 寺島朱音 【平29卒】 伊藤誠 首藤真衣 末武正範 【平30卒】 池野守裕 鈴木碧 竹田裕徳 津山夏維 早川侑 林慶彦 【平31卒】 木下洋一郎 佐藤萌子 髙橋玲南 【令和2年】 岩崎千南 菊地光翼 久保光 齋藤莉央奈

佐藤大吉 瀬下夏澄 田長和真 寺島琴乃 渡邊美波 【令和3年】 飯田真由 大久保遥 計良修司 近藤あかね 末武美咲 高橋樹 土屋美晏フラ 本間日奈子 桃井花楓 【令和4年】 金森大海 根岸勇翔 望月翔悟 【令和5年】 根岸乃翔 松井里香 【令和6年】 戸田貴文 戸田皓文 東野芽海 桃井檀 坂下智英 末武佑理 野口美月 山本愛紗 田屋明彦

【令和６年度　県立佐渡高等学校同窓会決算書】

令和７年３月31日現在

(収入の部)　(単位：円)

項目		予算額 (a)	収入済額 (b)	未収入額 (b-a)	摘要
1 繰越金	前年度繰越金	2,438,693	2,438,693	0	
2 会費	入会金	1,019,000	1,017,000	△2,000	1年@2,000×194、2年@2,000×187 3年@1,000×187、分校70,000
	会費	4,725,000	4,783,000	58,000	(@2,000−200)×2,625人
3 書籍販売	百年史	9,000	9,000	0	@3,000×3冊
	その他	10,000	0	△10,000	「同窓のおとずれ」他
4 寄付金	寄付金	10,000	0	△10,000	
5 その他	預金利子	7	718	711	
	その他	3,300	0	△3,300	徽章販売収入
収入合計		8,215,000	8,248,411	33,411	

(支出の部)　(単位：円)

項目		予算額 (a)	執行済額 (b)	執行残 (a-b)	摘要
1 運営費	人件費	350,000	280,530	69,470	事務局職員賃金
	事務費	50,000	11,066	38,934	備品購入代(パソコン、プリンター等) 消耗品代(資料用紙、印刷費)
	通信費	30,000	12,899	17,101	はがき、切手代等
2 会合費	会議費	70,000	36,432	33,568	役員会旅費
	総会費	400,000	408,491	△8,491	総会補助、ポスター代
	会合費	1,200,000	939,968	260,032	支部総会・同期会補助、役員出席旅費
3 広報費	広報費	3,300,000	3,145,582	154,418	同窓会報
4 慶弔記念費	慶弔費	50,000	0	50,000	電報等
	入会記念費	210,000	207,129	2,871	卒業証書ホルダー
	転退職員記念費	60,000	25,000	35,000	転退職員餞別
5 学校後援費	施設整備費	500,000	396,023	103,977	校舎環境整備等(エアコン補助)
	生徒活動費	900,000	1,163,644	△263,644	全国・北信越大会補助
	講演会費	20,000	18,370	1,630	講演会謝礼他
6 舟崎文庫	舟崎文庫費	50,000	33,499	16,501	獅子ヶ城会館電気料
7 雑費	雑費	10,000	0	10,000	
8 積立金	特別会計積立金	200,000	0	200,000	130周年積立
9 予備費	予備費	815,000	28,000	787,000	
支出合計		8,215,000	6,706,633	1,508,367	

差引残高　8,248,411　−　6,706,633　＝　1,541,778

六年間の獅子ケ城

―戦中・戦後の記憶―（その3）

本間弘美（昭和26年卒）

1．古雑誌も貴重品？

私が佐高に通った六年間のうち、前半の三年間（昭和20年4月～23年3月）は、戦後の物資欠乏のドン底の時代だった。国民は衣食住すべての面で不足に悩まされていたのである。佐渡は空爆を受けなかったから、焼け出された都市部に比べれば、まだ恵まれていただろう。だがまだ中学生だった当時の生徒たちには、腹一杯食事をとれることが心からの願いだった。それにとどまらない。チリ紙が手に入らぬこともその一例だろう。

昭和20年11月のある日、両津出身のK（メンチ）が私に言った。

「お前の家は昔は呉服屋だったさけ、『主婦の友』みていな古雑誌はたくさんあるだろ。一冊もってきて呉（ク）りいさ」「なんに使う？」私は聞き返す。「ハナ紙さ。便所紙にも使えるしな」

Kは当時はまだ残っていた木造寄宿舎に入居して、毎日そこから二分の通学時間で教室に来ていたのだ。物資欠乏の時代だったから、寄宿舎の生活も不足不便があることは、私にもよく理解できた。

私は帰宅後、母に古雑誌がないか聞いてみた。でも無かった。古雑誌も古新聞もすでに便所用などに使って、何も残っていない。それでも母は古い大福帳を持ってきて、ばらして、チリ紙に適した柔らかい紙を30枚位集め、翌日登校したらKに渡すようにと私に言った。

翌朝私はそれをもって登校したが、なにか生徒全員が屋外作業になって、Kに会えなかった。それやこれやでボロ紙のことは、それきり忘れてしまった。Kからの催促もなかったので、その件はウヤムヤに。たぶんKは別の級友に頼むかして、彼なりに解決したのだろう。でも私は80年過ぎた今でもときどき思い出す。あの時俺はもっと親身にKの頼みを理解してやればよかった……そんなニガイ一片の記憶になって。

2．「体育佐中を目ざせ」仁丹校長

戦後まもなく胃潰瘍で亡くなった林準一校長の後任には、県庁の内務部教学課主事の加治千三朗が任命された。佐渡では体育関係者が校長になるのは初めてで、それなりに熱い期待で迎えられたらしい。しかし一般の生徒たちには、加治校長の顔の真ん中に「八」の字に伸びた口ひげが強い印象を与えたらしく、いつのまにか「仁丹」という渾名が定着してしまった。仁丹とは昭和初期のころから広く全国的に薬屋で売られていた薄荷清冷剤で、そのポスターには八の字ひげを生やした旧日本軍隊の将軍が登場し、いつも通行人に睨みをきかしていた。（商標と似顔絵参照）

加治新校長は着任後まもなく全校集会で述べた。次のような要旨だったと思う。

「日本は戦争に敗れた。今は全国民が混乱している。だが君たちは若い。だから体を鍛えてこれからの日本を再建しなければならない。そのために体育に励め。君たちはこれから体育佐中を目指して全員で進め。それが戦争に負けた日本を再建する道である。……」

私はあい変わらず一年四組の級長で、最前列にいたから、よく聞こえたし、よく理解（ストライキ）できた。時はまだ九月。同盟休校事件の前で、生徒の間には何となく教師不信の空気が漂っていたが、大多数の生徒は納得したようだった。

翌昭21年4月。新年度の授業と同時にクラブ活動も始まる。文化部門では文芸、音楽、美術、郷土、新聞などの各クラブ。運動部門では陸上、野球、庭球、卓球、篭球、排球、水泳、登山などの各クラブだった。このような生徒の自発的向上を目指す活動は、学校による知識伝達活動を上回る勢いを見せる時期もあったらしい。戦前、戦時中を通して禁止されていた生徒による自主研究が、いっせいに火を吹き始めた、と言ったら褒めすぎだろうか。

加治校長が唱導した体育佐中のスローガンは、かなり成功したと思われる。島内の中等学校の各種大会や、全県の大会でも、佐中（後には佐高）はしばしば上位に入賞。特に水泳部は昭23・24・25年の県大会で三回連続の優勝を果たして栄光に輝いた。

商標「仁丹」と校長「仁丹」

3．英語は赤点？

昭20年9月、敗戦後の校内の混乱は10月下旬の全校ストライキの後、少しずつ収束してくる。教師の出張や欠勤などで授業が自習になることもよくあったが、なんとか本来の学校らしい姿が戻ってきた。

そのうち2学期も終わりに近づく。期末考査がある。試験勉強をしなければならぬ。けれど私はほとんど勉強できなかった。とくに英語がダメだった。理由は教科書がなかったから。

前にも述べたが、戦争末期の昭20年はすべての生活必需品が不足し、教科書販売の書店には売れ残りを除いては何もない。英語の教科書はどこにもない。おそらく販売責任をもつ文部省は、この年度には何も教科書を発行しなかったのだろう。戦争遂行のために政府は緊急学校勤労員要項を決定し、全国の中等学校生の授業を停止し、軍需工場での勤労作業を強制した。国全体が火・の玉になって戦争に協力しているときに、授業や教科書を考える方がオカシイ時期だった……ところが日本は戦争に負けた。国民はみな騙されたのである。

学校は「教科書がない生徒は、上級生から譲ってもらえ」と言うだけで、教材をプリントして生徒に配ることなど、何もしてくれない。学校も実は紙も謄写インクもなかったらしい。

そんなあり様で、私の二学期の成績はガタ落ちだった。よく覚えていないが、英語は赤点スレスレだったらしい。

4．ようやく二年生に

このままだと落・第かもしれない。私は心配になった。

その時の佐渡中学校はまだ古い教育制度下にあって、義務教育ではなかった。だから学校が、学力不足と判定した生徒には進級を認めない事例はいくつかあったのである。

私は落第を免れるために英語の勉強を始めた。ちょうど冬休みに入ったので、近所の友だちから英語の教科書を借りて、ノートに写し始めた。慣れないので時間ばかりかかる。一ページの本文を写すのに一時間以上かかった。けれども写していくうちに、英語の文の組み立て方が少しずつ分かってきた。ちょうど進行形を学習するレッスンでbe～ingは（～しつつある）の意味になることが理解できた。それから普通の文章（平叙文）や疑問文、否定文の組立て方なども、少しずつ分かってきた。分かり始めると勉強はおもしろくなる。そんな次第で3学期には、毎日の勉強がそれほど苦にならなくなった。けれども単語を覚えるには苦労した。そのためにじぶんで小さなノートを作り、新出の単語をすべて書きこみ、片端から憶え始めた。毎日の英単語学習が大切な日課になる。それやこれやで3学期末の一年生の最終成績では、なんとか及第点に達したらしい。こうして私は晴れて二年生になれた。

5．教科書製本作業は各自で

昭和21年4月、私は佐中の2年生になった。編成替えになったクラスは1組。担任はK先生（数学・渾名はナマズ）　新学期から数日後、担任は新聞紙位の大きさの紙束を抱えて、教卓の上にドサッと下ろした。それを生徒全員に一部ずつ配る。その当時紙は貴重品だったから、私たちは何だろうと思った。広げてみると紙の裏と表に英語がいっぱい印刷されてある。それも上下逆さまに印刷されて、数字が各ページにつけてある。「ナンダコリヤ？」生徒がブツブツ呟く。K先生が説明した。

「これは新しい英語の教科書だ。紙を細かく切ってページ順にそろえると、一冊の本になるはずだ。あとは各自家へ帰って本を作れ。ウマくやるんだゾ」

こうして生徒各自が英語の教科書を製本することになった。本来なら教科書を作る仕事は、文部省が出発点（スタート）から到着点（ゴール）まで全責任を負うて、完成させるのが常道である。当時は教科書はすべて「国定」だった。それなのに文部省は最後の重要な作業「製本」を投げ出し、それを全国の中学生に圧しつけたのだ。

こんな訳で私は教科書作りにはひどく苦労した。約80年も昔のことでよく憶えてはいないが、A1版（新聞紙2ページの大判）の紙を何度も折りたたみ、A5の大きさまで鋏を使って切り分ける。それをページ順に揃えて一冊の冊子にまとめる。このまとめの作業がたいへんで、30枚くらい重ねたワラ紙に、錐で二ヶ所穴を開ける。その穴に木綿糸を通した縫い針をくぐらせて、最後に二つの穴を貫通させた糸の両端をしっかり結ぶ。それで完了――だがひどく苦労した。なにしろ鋏も錐もふだんはあまり使わないので、よく利かない。現在なら鋭利なカッター、ホチキス、穿孔道具類など便利な道具はいろいろあるが、当時私の家には何もなかった。なんとかあり合わせの道具で作り上げたのである。けれどもまるまる二晩の時間を要した。今では考えられないようなことが、85年も昔の暮らしの中では、ごく当たり前だったのだ。

こうして不細工ながら完成したワラ紙の小冊子の第一課にはWe are now in April. The sun shines brightly in the sky. ……と英文が印刷されていた。私はそこに何か輝かしい春の到来を祝福する力強さを感じた。

英語の担当はM先生（渾名はスッポン）だったが、第一課の英文は生徒全員に暗唱させた。私もその頃はまだマジメな少年だったから、クソマジメに暗唱したものだ。それが後に英語の基礎学力を固める上でとても役に立ったと思う。教科書の製本はバカらしい作業だったが、学力の向上には役に立った思い出深い仕事だったと言えようか。

6．「佐中」から「佐高」へ

昭和22年5月、新憲法が公布され、翌23年1月に新制高校の設置基準が発表された。それに合わせて、同年4月から全国各地の旧制中学校は、そのまま新制高校に変わった。佐渡中学校は「新潟県立佐渡高等学校」に変身した。いわゆる6・3制教育制度が導入されたのである。これは教育制度の大変革だが、国内に反対はなかった。なにしろ米軍占領下のGHQ（連合国占領軍総司令部）からの命令だから、反対は不可能。服従するしかなかったのだ。

しかしこの教育制度の変更は、国民には好感的に受け容れられた。「国の為に死ね」という軍国主義教育が、民主主義下の自由を保障された教育に変わることに反対する国民はひとりもいなかったのである。

とにかく私たちは佐・中・生から佐・高・生に変身した。家庭事情で転退校した生徒も若干いたが、全員がなにもしないうちに高校生に格上げされた。大部分の生徒には、新鮮な達成感や、成長し

たという自負心も薄かったのではないだろうか。

7.6年間在学中の楽しみ(1)

敗戦から昭27年4月まで、米軍の占領下に置かれた国民の日常生活は、貧しく窮屈だった。しかしそんな苦境下でも学校が楽しくなかった訳ではない。生徒によって差はあるが、私の場合は島内の学年別の徒歩小旅行と全校生の映画鑑賞会である。その思い出を略記しておきたい。

①中3年時小旅行(小木・赤泊方面)

コース=新町(集合)→西三川→渡津神社→羽茂→小木(泊)→沢崎灯台→宿根木→小木→大石→赤泊(泊)→川茂→新町(解散)

私には佐渡南部は初めての土地。訪ねてみたい所ばかり。そこで沢崎灯台まで歩いたのだが、苦労の連続だった。なにしろ小木の台地は荒地や森が多く、集落をつなぐ広い道は不明。おまけに俄雨もあって、傘をもたない小生はズブ濡れ。それでも何とか灯台に到着。霧雨で視界は悪かったが、なんとか島の西南の端まで来たんだ、と実感に浸れた。

小木に戻る道は遠いし時間もない。引率の先生が灯台長に頼みこんだらしく、櫓舟を出してもらえた。宿根木に上陸してからはまた歩く。小木から赤泊までは約15キロ。やむなくこの区間だけバスを利用した。最終日は小佐渡山脈を皆が歩いて横断。途中の川茂集落ではチョッピリ桃源郷のような感じを受けた。

この三日間に歩いた距離を合計すれば百キロを越すのではないか。全員が無事故で終点まで到着した。我ながら「よくぞヤッタ」と感嘆する。

②高1年時小旅行(昭23年4月下旬松ヶ崎・水津方面)

コース=畑野(集合)→小倉峠→(希望者は男神・女神山登山)→多田(泊)→松ヶ崎→岩首→野浦→水津(泊)→姫崎灯台→両尾宇賀神社→両津(解散)

高校一年の春。私たちも心身ともにあるていど成長していた。畑野から長谷、小倉峠を越えて、前浜の多田まで23キロの道を、二百人以上の生徒たちは元気に歩いた。峠を過ぎると急な下り。そこで希望者は男神・女神の山頂に寄り道してもよい、ということになった。私は初めての山なので登ってみたいと思い、主隊から離れた。(その頃は生徒の自由行動があるていど広く許されていたように思う)ところが男神山への登りはきつかった。ほとんど直線の登りで汗ダク。ヘバった。やっと辿り着いた山頂には小さな神社があり、近くに井戸があった。井戸には四月下旬なのにまだ雪がいっぱい残っていた。手ですくって食べた雪のうまかったこと、忘れられない思いがある。

男神山から少し歩くと女神山。ここには無線中継所があり、関連した工事が進められていた。工事関係者の中に佐中の卒業生がいて、私たちの来訪をとても喜んでくれた。

多田の宿では広い部屋に二百人が寝た。就寝前の約10分、盛大な枕投げ合戦で騒いだことを憶えている。

翌朝、宿の前の砂浜で漁師たちが地引網を引き揚げていた。私たちも手伝った。宿の朝食にはこの網で引き揚げられたイワシの塩焼きが出されたが、そのうまかったこと。80年を過ぎた今でも忘れられぬ味である。

松ヶ崎から水津まで。今は完全舗装の佐渡一周線で、車やバイクで快適な旅ができる。しかし当時はすべて砂利道で、道幅も一車線ギリギリが大部分だった。そんな道を私たちはテクテク歩いた。左は高い崖、右には広い青い海。はるか彼方には弥彦・角田の山も見える。歩いているうちに喉が渇いた私は、左手の崖から落ちてくる水を手ですくって飲んだ。「バカ、それは上の田圃から流れてきた水ヤぞ」たまたますぐ後を歩いていた地元のKが教えてくれた。だが水はうまかった――少し生臭かったけれど。

三日目。宿を出た私たち一行は姫崎灯台に行ってみた。けれども先頭に到着した連中は入り口に留まって、台長さんと何か口論している。どうも台長さんは私たちが見学に来るとは知らなかったらしい。学校も事前に連絡はしなかったのだろう。しばらく言い合いが続いていたが、そのうち引率の先生が到着、台長と話し合ってなんとか見学の諒解は得られたらしい。台長は先生に「私たちはpublic servant(公共奉仕員)ですから、皆さんの為なら何でもやります」てなことを言っていたのを断片的に憶えている。灯台の中は狭いので10人位の少人数で順番を待った。その為に時間がかかった。

現在は日本の灯台はすべて無人で動いているが、当時はまだ人力を要する施設だった。私たちはなんとなく、公共施設だからいつでもだれでも行けば見学できる、と考えていた。学校も同じだったのだろう。当然、事前の連絡了解は得ておくべきだった。

姫崎灯台から両津までは一本道。私は数人の級友と宇賀神社に寄ってみた。以前から「ウカジンさん」は大晦日の夜は大賑わいになる、と聞いていた。でもまだ参拝したことはない。行ってみるのもよいか。長い登り階段で汗をかいたが、頂上の社殿から眺めた風景にはショックを受けた。眼下に広がる両津湾、その向こうから迫ってくる大佐渡の山々の姿――なにか巨大な自然に圧し潰されそうな小さな自分という存在。私にはそんな感じがして、ここが一種の霊気を秘めた場所だ、という認識を新たにした次第である。

それから二十数年後、私は二、三回この神社に登り、同じ風景に向かい合う機会があった。でも残念ながら感動はほとんどなかった。理由のひとつは、社殿の周囲の森の梢が伸びて両津湾が見えなくなってしまったのだ。海が見えなければ絶景も消える。観光関係者には、伸びた梢を切るとかして、一考をお願いしたい。

③高2年時小旅行(新潟・弥彦)

昭和24年春。行先は島外に変わった。戦後の混乱もようやく落ち着いてきた頃である。だがどういう訳か私にはこの時の記憶はあまり残っていない。憶えているのは、弥彦山頂まで登って海の彼方に浮かぶ佐渡を眺めたこと。越後線の列車の窓から田植えが終わったばかりの蒲原平野の広さに驚いたこと。新潟の旅館では、何人かの級友の親類が訪ねてきて、夜の歩道で三々五々立ち話をしていたこと。その位しか憶えていない。新潟の市街地は戦時中爆撃を受けなかったので、古い街並はそのままの姿で残り、高い建物は「大和」と「小林」のデパートくらい。残りはほとんど黒い瓦屋根の民家ばかりだった。

④高3時の旅行……中止

高3になって間もなく担任のN先生(国語 一渾名はピヨ)が朝の連絡時間に告げた。

「みんなが希望すれば、東京へ修学旅行してもよい。どうするか、次のHR(ホームルーム)で討議して決めなさい」

HRの時間には賛否両論いろいろ発言はあった。賛成者は喜んだが反対も少なくなかった。突然の提案なので、各自の気持ちもグラついている。何より旅費の工面ができるか、家計も苦しい。その頃はまだ修学旅行のための積立て預金はしていなかったから、「オレはダメだ」と諦める生徒も多かった。

私は乱暴だったが発言した。「旅費がなくて行けない奴が半数以上いるようだ。だからここで討議してもムダだ。行きたい奴だけ別の場所に行って相談して決めたらいい。」

これが決定的ブチこわし発言になって、私のクラスは不参加になってしまった。

実は私は東京生まれの東京育ち。小学6年から佐渡に疎開した流浪の民の一人である。だから東京を再訪したい想いも強かった。けれども幾人かの級友が「旅行にいけない」と洩らしていたので、思わずクラス討議に「冷水(ひやみず)」をブッカけてしまった。「オレはやり過ぎた」という思いは今も残っている。ところが3年の他の三つのクラスも反対の方が多く、学年全体としては「とり止め」になってしまった。そろそろ近づいてきた卒業後の進路のことを考えねばならない時期に、金のかかる旅行をするとは、もともと企画に無理があったのだろう。

なおこの時、南校舎(旧河原田高女)の女子クラスでは、東京への修学旅行を実施した。昭和25年頃は新制度の佐渡高校はまだ男女『別学』だったのだ。机を並べて男女の生徒が共学になるのは、昭和27年4月の入学生からだった、と記憶する。「女子は卒業するとじきに結婚する。旅行も困難になる。だから在学中に旅をさせるのがよい」まだそんな風潮が色濃く残る時世だった。

敗戦から数年間のことを書いていくうちに、また紙幅を超えてしまった。実は私は、全校映画観賞会(仮称)のことも書いておこうと考えていたのだが、今回も紙面の都合でできなくなった。恥じ入るばかり。すべて私の非力の為で、お詫びするしかない。私は欲が深くて、他にも書き残しておきたいことがある。それは、昭和27年から10年以上も続いた佐高の「大学進学黄金時代」についてだが、今は不可能。できれば来年に書かせていただきたいと思う。小生の健康状態は今のところまあまあで、運が良ければ百歳まで生きられるかも。

がんばります!

令和7年度 金沢支部総会

期日：6月1日(日)
於：食い処ひきの

鈴木同窓会長諸用の為、副会長の永田治人様、学校長川上豪様をお迎えして開催し、来賓のご挨拶をいただきました。

本年度は佐渡高等学校同窓会の懇親会運営担当支部となり、吉井支部と合同の金井支部として計画し、議事にも、行事報告・行事計画(案)、会計決算、会計予算(案)、役員改選に続いて「(4)令和7年度佐渡高等学校同窓会金井支部実行委員会の立ち上げについて」を提案し、現在までの取り組みの経過と今後の予定を説明いたしました。

総会終了後、西田健司吉井支部長による乾杯の音頭で懇親会の宴が始まり、学校長、副会長、金沢・吉井両支部の交流会が2時間余りに渡って続けられました。

最後に親和会歌(旧制第一高等学校の寮歌「ああ玉杯に花うけて」のメロディーに金沢支部の昔の先輩が歌詞をつけた支部の歌)の唱和が行われ、続いて昨年4月「旭日単光章」綬章の、天池範夫様のご発声による万歳三唱で締め括り、今年も支部総会は盛会裏に終了いたしました。

8月24日(日)の佐渡高等学校同窓会(於Ryokan浦島)に向けては、今回の参加者全員の協力を得て準備をし、そして運営をしていきたいと思っています。

支部長　畠山　茂樹
(昭和38年卒)

昔語り

「橋　幸夫がやってきた。」

矢田　有年（昭和28年卒）

令和六年八月十四日夕、盆の入りの日だからと音楽番組をと思いテレビのスイッチを入れた。「六十四年前のことです。それより早く歌わせてください。」と言って出て来たのが、橋　幸夫である。三橋美智也、春日八郎らの大歌手に次いで昭和35年春、最初の和装の歌手として「潮来笠」をヒットさせた。まだ二十歳前の青年、橋　幸夫が「週刊明星」のグラビアを飾る写真を撮りに佐渡へやって来たのである。昭和35年秋の事である。

対応は新潟交通の「おけさキャラバン隊」が行う予定だったが観光時期だった為、時間が取れず、佐和田の出身の若い女性だけで作った民謡集団「乙和会」に廻ってきた。

会場は窪田の至誠堂裏の「越の松原」の平坦地。踊手は「乙和会」、囃方と唄手は佐和田の「松浪会」で、「佐渡おけさ」と「相川音頭」を披露し海岸へ出て写真撮影、最後に「おけさ人形」を丸山政子会長が贈呈してメにした。その夜は皆さん「すや旅館」に泊まったので、またそこで「佐渡おけさ」を披露した。

「乙和会」は「県指定 乙和池」に伝わる古い悲話から名づけられたものと言い、佐高31年卒の丸山、岩原、田中の3人を中心に一級上に3人一級下に1人の計7人のメンバーで、囃子方、唄手は「松浪会」に委任されていた。

当時、新潟交通佐渡営業所長雨森さんは百万人佐渡観光を目指して観光バスの運転手、バスガイドの内で民謡団体「おけさキャラバン」を構成して、当時佐渡一番の民謡歌手、杉山茂左衛門を職員に採用して観光時期を過ぎると全国を「佐渡案内」して廻っていた。

夜の観光客に踊りを見せるのにバスガイドの方が不足するので「松浪会」の岩原さんに相談して昭和32年に「乙和会」を結成した。

当時佐渡は高校を卒業すると進学か就職かで佐渡に残る人は少なかった。先ずは岩原さんの娘、次は同じ東北電力に勤めていた田中さんの娘、次に交通主催の第5回伝統民謡コンクールに小木から船で真野湾を超え盛装してやってきた2人の姉さんに次いで三位になった三尺帯でオカッパの少女、丸山と3人が決まり、3人で声を掛けて若い人達のメンバーが決定、囃子方、唄手は松浪会にお願いしていた。

「乙和会」は未完成年、昭和34年秋にも大役を果たしていた。新潟交通本社の野球部が、都市対抗野球地区大会に勝ち、東京の「後楽園」の全国大会に出場することになった。どのチームも地域の民謡踊等を応援団にしてダックアウトの屋根の所で躍らせるのである。その大会に「おけさキャラバン」に代わり「乙和会」が出場することになった。「後楽園」で踊るなんて度胸の要る事である。しかも囃子方は「松浪会」のが都合がつかず真野の「小波会」にお願いした。鬼太鼓の方は舟下の鬼組みである。新潟から一台のバスに乗って東京へ行き、無事責任を果たして帰島した。雨森さんの百万人観光はうまくいかず、本人は本社に呼び戻され、佐渡汽船は大型フェリー就航等があって夢のような話となってしまった。

現在は「コロナ禍」等あって観光客は五十万くらいだと言うが、今回の「佐渡島の金山」の世界遺産登録の結果どうなるか楽しみにしたいと思っている。

「乙和会」も雨森さんと岩原さんの努力によって結成されたが、若い女子ばかりの団体で、唄手も囃子方もいない団体だったので、昭和35年の「橋幸夫、佐渡へ来る」をピークに、結婚したり島外へ出る人がいたりして、正式な解散式もできずに踊の「浴衣と帯」を「記念品」として消滅してしまった。当時の人達は「乙和会」の存在や「橋幸夫」のことなど知っている人は少なかったと思う。

なお、橋　幸夫さんが8月24日コンサートのために来島されます。正に64年ぶりのことです。

「松浪会」「乙和会」　窪田浜にて

橋　岩原　田中　丸山　三浦　計良

橋　幸夫さんと「乙和会」一同

橋　岩原　田中　丸山　三浦　計良

佐渡高校時代の思い出

―世界史の先生が教えてくれた貴重な1冊
「西部戦線異状なし」レマルク著―

北川　淳子（昭和40年卒）

海に巡らされた我が佐渡島もとても大きく広い。海だってたった1回しか行った事もないし、広い田畑の平野から一歩も外へ出たことのない私。その1回の小舟での体験で船酔いする様な狭い範囲で育った十七ヶ年。２００ヶ国もあるという事さえ知らず、それもそのはず、世界史では見事赤点をとって母と一緒に学校に呼ばれて学級主任の先生からよくよく注意された。それでも日本史は田中先生で、これも危しい位で、今になって（松浦武四郎を研究する六十年後の今やっと）歴史にも少し目覚めた。17歳高2のとき、世界史の先生が盛んに勧めたのが、我々と同年齢のドイツの青年レマルクが第一次大戦に参戦しての体験を一冊の本にまとめ、ある新聞社を通じ1922年に出版された本なのであった。

先生は、若々しい立ち姿で教壇を行ったり来たり、目を光らせて我々にこの本を語ってくれた。（確か、林先生ではなかったかな？）先生の教壇の前を行き来され、口角泡を飛ばし強調された本を60年後の今、頭に浮かべた。それは、「西部戦線異状なし」を読んでみようという気になったのだ。内容は第一次大戦（1914～1918年）に一年間参戦し体験をした16歳のドイツの少年レマルクの作である。先生はちょうど我々高校生の年齢に合っていると思われ、私たちに推してくれた貴重な本であるのに…、全く覚えていないのだった。

今年2024年、町の図書館で聞いてみたが、どの町の図書館に問い合わせても無いと言う。やっと一か月後、北海道立図書館からボロボロ、ページをめくるのも恐ろしい位、紙が零れ落ちそうな小冊子の本の連絡があった。これは大変、家になど持って帰ってじっくりと読める本ではないと思い一日図書館の広い机と椅子に座って、そおっとページをめくり、司書の方に「今日中にお返しします。」と言って読み始めたものだった。何しろ紙は茶色、文字も小さく薄くはがれ、文庫本であるこの本は、1929年世界的に爆発的売れ行きを示した。ドイツエリッヒ・マリア・レマルクの第一次大戦の戦争を本人レマルクの体験を通し参戦した若者の心が、体以上に心を病み死と向き合うこととなった主人公パウルは、まさにレマルク17歳の本人であり、いかに夢多き若者の未来を閉ざし生き残った人々の心にも重い心の傷を負わせた「戦争の真実」を伝えてくれる貴重な一冊の本だったのです。

これ以後第二次大戦物が次々に生まれ絶望的苦境における戦記物は洋の東西を問わず、多々あったが第一次大戦での記録は、たったこの「西部戦線異状なし」が貴重な一冊だったのだ。しかも講義を受けている我々も17歳（高2）。私と同じ年齢なのに全く環境の違う自分には理解できずにいた。しかしよく考えてみれば私の父も中国満州事変に参加し（教員をしていたが）肺結核で帰国させられ寝たり起きたり。私が19歳まで、母や家庭をてこずらせては、母の「恩給さえもらえればなあ」と嘆きを聞いていた私の青春時代だった。

ヒットラーの政権獲得からほぼ100日後の1933年ベルリン大学では「政治的にも道徳的にも非ドイツ的な書物」として焚書として火に投じられた。レマルクの本は大戦の体験を描いたものであったが、戦争体験神話を信じる政府からは裏切り者とされたのである。世界史の先生は、私たちと同じ年齢の若者が第一次大戦に従軍1ヵ年で負傷、ほぼ大戦の終わるまで病院で療養生活を送り、その後ジャーナリストとなったり、小説・作家となったがうまくいかなかったことを話してくれた。自殺への思いもつのり、不潔な泥まみれの壕生活、敵の銃弾、砲弾を浴び一人で死んでゆく戦争が神話化され民族共同体の聖なる全体主義への道を歩むことを食い止めようと必死に抗う為の一冊だった。先生は、当時、我々と同年代の17歳に、この広い世界を若者はこれからどう導いてゆくのか、一人の青年の苦しい体験を学び今の我々17歳をいかに平和な世界、日本へと導いてくださったのである。ほとんど手に入らなくなった今どんな戦争体験よりも身に染む1冊である。

第36回「紫苑会」関東支部総会開催報告

令和6年11月10日(土)、東京都新宿区市ヶ谷のホテルグランドヒル市ヶ谷において、佐渡女子高校同窓会「紫苑会」の第36回関東支部総会を開催しました。総会は本間淑人副支部長(昭39卒)の司会により、飯平孝支部長(昭41卒)の開会あいさつで始まりました。来賓として令和6年春の叙勲で旭日単光章を授賞されたされた元紫苑会会長天池範夫様(昭28卒)と旧金井町役場助役を努められた山本茂様(昭37卒)を佐渡からお招きしました。お二人からは、佐渡金山の世界遺産登録に纏わる話題や、佐渡市が抱える現状の問題点や将来展望、懐かしい祭事の変遷や日々の暮らしのあれこれについて語っていただきました。第二部の懇親会は近藤悦雄様(昭31卒)の乾杯の発声で始まり、前支部長堀孝二郎様(昭38卒)の協力により、おけさ友愛会による佐渡おけさをはじめ両津甚句や相川音頭、新穂音頭などなど懐かしいふるさとの歌と踊りが披露され会場は大いに盛り上がりました。

終宴は全員で校歌を合唱し、元関東支部長の荒井敏彦様(昭36卒)より、40年間の活動に対する謝意と惜別の挨拶があり、健勝と再会を期しての散会となりました。

なお、紫苑会関東支部は、会員の総意により今回の開催をもって休会とすることになりました。

紫苑会関東支部は1985年(昭和60年)、ときの紫苑会会長本間ハル様(昭2卒)の慫慂を受け、飯島美孝様(昭29卒)を中心とする在京卒業生有志により、当時活動休止状態となっていた関東支部が再建されました。爾来40年、母校の統廃合により紫苑会本部が発展的解散となった際にも、会員多数の継続を望む声を受け、任意団体として今日まで活動してまいりました。この間、佐渡高校の諸先生方、佐渡高校同窓会長はじめ関係者の皆様、また母校の諸先生方、紫苑会本部関係者の皆様には格別のご支援ご協力を頂きましたこと、関東支部役員一同、この場をお借りして厚く御礼申し上げる次第です。

長い間、誠にありがとうございました。

(記　本間淑人)

蒼穹の下の蕾

渡部　翔稀（令和7年卒）

令和7年3月に佐渡ヶ島の佐渡高校を卒業した渡部翔稀です。現在は新潟大学医学部医学科の1年生として、新しい環境で学んでいます。

医学部と聞くと、多くの方がすぐに専門科目に取り組む厳しいイメージを持つかもしれませんが、1年生のうちは教養科目が中心です。英語や数学、物理、情報など幅広い授業を受けていて、高校の頃に想像していたほどの忙しさはまだ感じていません。

むしろ今のうちに基礎を固め、生活習慣を整えることができる貴重な時間だと感じています。この1年を通して自分を見つめ直し、将来に備える期間にしたいと思っています。

新潟大学医学部には総勢140名の仲間が在籍していて、入学式後の新入生歓迎会や部活動体験を通して多くの同期と交流することができました。それぞれ出身や価値観は異なりますが、話すたびに新しい発見があり、刺激を受けています。特に自己紹介で佐渡ヶ島出身だと伝えると、「どんなところ?」「何があるの?」「食べ物は美味しい?」など、さまざまな質問をされました。話しているうちに、自分にとって当たり前だったことが人には新鮮に映るのだと気づき、地元を誇らしく思う気持ちが強くなりました。一方で、うまく説明できないこともあり、もっと知識を深めたいとも感じました。

新潟大学には医学科のみで構成される多彩な部活動があります。僕はその中でゴルフ部、スキー部、軽音部に参加し、新しい挑戦を通じて人とのつながりが広がってます。先輩方は初心者の自分にも温かく接してくださり、少しずつ自信も芽生えてきました。

これから専門的な学びが本格化しますが、学業だけでなく、人との関わりや経験も大切にしながら、一歩一歩成長していきたいです。そして、将来は佐渡ヶ島で地域医療に貢献できる医師を目指して努力を続けていきます。

今回、「蒼穹の下の蕾」の原稿を書かせていただけたことをとても誇らしく感じています。この文章を綴りながら、佐渡高校で共に過ごした友人たちがそれぞれの進路で励んでいる姿を思い浮かべ、勇気をいただきました。佐渡高校の伝統であるこの「蒼穹の下の蕾」という企画が、これからも長く続いていくことを願っています。

23年間、音のない世界でバレーボールと共に

加賀　充（平成21年卒）

私は生まれつき聴覚に障害があります。手話が主なコミュニケーション手段ですが、静かな環境での一対一であれば音声での会話も可能です。出身校は金井小、金井中学校、佐渡高校です。現在は長岡聾学校の教員として勤務しています。幼少期は新潟聾学校で学んでいましたが、小学校からは地元の金井小学校に通いました。

小学5年生の時、母の勧めで入部した、かないｊｒバレーボールクラブとの出会い、初めてバレーボールに触れた瞬間から、このスポーツの魅力に取り憑かれ、気がつけば23年もの歳月が流れていました。中学、高校ともにバレー部に所属し、厳しい練習や上下関係を通じて、技術だけでなく、自信をもって生きていくモチベーションとなりました。

大学進学後、私の人生を大きく変えた「デフリンピック」という舞台と出会います。聞こえない人のためのオリンピックとも呼ばれるこの国際大会で、私は男子デフバレーボール日本代表としての道を歩み始めました。デフバレーでは、全員が手話でコミュニケーションを取れる環境の中で、音声情報では得られなかったことが手話でコミュニケーションがとれるようになりました。日本代表で活動していくうちに、メンバーとの意見が衝突することもあったり、様々な人との出会いがあったりして、人として大きく成長できました。

２０１３年のブルガリアデフリンピック大会での予選敗退という悔しい経験を糧に、腰のヘルニアと闘いながら、２０１６年アメリカ世界選手権６位、２０１７年トルコデフリンピック７位、２０２２年ブラジルデフリンピック８位と、着実に実績を重ねてきました。特にトルコ大会での経験は、私の人生における大切な財産となっています。

ブラジル大会後、代表引退を考えていた矢先、２０２５年東京デフリンピックの開催が決定しました。職場や地元の方々からの「加賀選手が出るなら試合を見に行きたい！」という温かい声援に背中を押され、再び挑戦を決意しました。２０２４年の沖縄世界選手権では、２番セッターとして途中交代で出場し、チームを鼓舞させるように務めました。職場の生徒たちから「感動した」という言葉をもらい、バレーボールを続けてきて本当に良かったと実感しました。このまま２０２５年東京デフリンピックにも挑戦しようと選考会に参加しましたが、落選となり、事実上日本代表は引退となりました。

15年に及ぶ日本代表としての活動の経験は決して無駄ではありません。どんな結果であっても、聞こえない私がバレーを続けることによって、私自身がその証明となり、周りもいい刺激になり、次世代の子どもたちに希望を与えられる存在でありたいと思っています。

２０２５年11月の東京デフリンピックでは、日本代表として出場することはできませんが、デフアスリートたちが世界の舞台で輝く姿をぜひ皆様に見ていただきたいと思います。

先輩に追いつけ！追い越せ！在校生の活躍

令和六年度（全国大会・北信越大会出場クラブ）

本校からは、新聞部、書道部が全国大会に出場しました。

相川分校からは、陸上競技部、バスケットボール部（男子）においては、全国大会で二連覇を成し遂げました。

佐渡高校では、多くの生徒が部活動に所属し、日々の練習や活動に積極的に取り組んでいます。引き続きご支援のほど、よろしくお願いいたします。

《本　校》

運動部

★印は全国大会以上
◎印は北信越大会以上

◆陸上競技部

◎北信越高校陸上競技大会
《男子》
【やり投】
14位　佐藤　蒼一郎

◎北信越高等学校新人陸上競技大会
《男子》
【400m】
6位　和田信之介ヤシン
【1500m】
4位　高野　佑輔
【5000m】
2位　高野　佑輔
【3000mSC】
2位　宇田　柊二
《女子》
【5000mW】
11位　青柳　結衣

◆女子バレーボール部

◎第60回北信越高等学校体育大会
ベスト8
佐渡　2－0　高岡龍谷（富山）
佐渡　1－2　東京都市大学塩尻（長野）

◎第45回北信越国民体育大会　3位
新潟県選手2年　長嶋　百花

◎北信越新人大会出場
雪のため中止

★全国高校選抜第22回2025
全日本ジュニアオールスタードリームマッチ出場（2月）
2年　長嶋　百花

★全国高校選抜選出
2年　長嶋　百花

◆男子バドミントン部

◎北信越大会
【学校対抗戦】
2回戦　0－3　長野商業（長野）

◆女子バドミントン部

◎北信越大会
【学校対抗戦】
1回戦　2－3　藤島（福井）

◆空手道部

◎空手道全国選抜大会北信越予選会（春）
女子団体形　出場　佐渡高

◎空手道全国選抜大会北信越予選会（秋）
女子団体形　第2ラウンド進出
女子団体組手　1回戦勝利
（3・2長野県飯田高校）

文化部

◆書道部

★第48回全国高等学校総合文化祭
書道部門　特別賞　仲川美海

★中日友好青少年書画撮影コンクール
準優秀賞　関口真穂

★第25回高校生国際美術展　書の部
奨励賞　仲川美海・米津結菜

◆囲碁将棋部

【囲碁】
◎第40回北信越高等学校囲碁選手権大会
男子個人A級　出場　笠井　良晟

◆新聞専門部

★第48回全国高校総合文化祭
新聞部門　出場
戸﨑　奏空
萩田　実那

《相川分校》

◆バスケットボール部（男子）

★全国高等学校定時制通信制体育大会
2年連続優勝
2回戦　66－65　県立郡山萌世（福島）
3回戦　76－50　県立碧南（愛知）
準々決　70－56　都立八王子拓真（東京）
準決勝　78－57　県立浜名（静岡）
決　勝　81－46　都立一橋（東京）
優秀選手賞　親松　陽介
市原　志憂斗

◆陸上競技部

★全国高等学校通信制陸上競技大会
1500m　金子　侑翔　予選敗退
二岩　魁斗　予選敗退
走幅跳　二岩　虹輝　予選敗退
三段跳　二岩　虹輝　決勝敗退

2025年3月卒業生の主な合格先

筑波大学、北海道教育大学、福島大学（2名）、埼玉大学、富山大学、金沢大学、信州大学、滋賀大学、愛媛大学、新潟大学（12名）、上越教育大学、新潟県立大学（7名）、新潟県立看護大学（4名）、長岡造形大学、都留文科大学（2名）、東京都立大学、下関市立大学、高知工科大学、名桜大学（2名）、早稲田大学、明治大学、中央大学、法政大学、立教大学、学習院大学、獨協大学、日本女子大学、同志社大学、立命館大学、自治医科大学、日本大学、順天堂大学、東海大学、駒澤大学、拓殖大学など。

例年と同様、大学・短大進学者は、卒業生全体の約7割になります。令和6年度3月卒業生の進学率は72％となりました。佐渡高校では、上級学校の受験で必要となる学力の育成に、日々取り組んでいます。また、生徒一人一人が進路希望を実現できるよう、丁寧で的確な指導を続けています。引き続きご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

過去５年間の卒業生の進路先

	2025	2024	2023	2022	2021
国公立大学	40	37	38	36	51
私立大学	94	58	65	84	61
国公立短大	0	2	2	1	1
私立短大	1	3	4	4	9
専門学校	41	31	31	34	46
就職	4	7	9	5	4
その他	7	7	4	8	7
卒業人数	187	145	153	172	179

ヘイワード派遣研修を振り返って

3年　山口　真央

私たちは約1週間、アメリカのカリフォルニア州アラメダ郡ヘイワード市を訪れ、様々な学びや経験を得ることができました。このような機会をいただき、研修に参加させてもらえたことに感謝の気持ちでいっぱいです。研修を振り返り、私自身が学んだことや感じたことを紹介します。

私は今まで、空気や人、治安など環境の変化が苦手で、旅行や佐渡から出ることはなるべく控えていました。しかし、異なる文化や言語を持つ外国には幼いころから興味があり、外国に行ってみたいという気持ちはずっと持っていました。この研修を通して、貴重な経験やたくさんの学びを得たことで、視野が広がり、もっと色んな場所や国に行ってみたいと思えるようになりました。広い世界を知ることで、自分の価値観を固定することなく、柔軟に物事を見ることができ、それが人生を豊かなものにしてくれるのではないかと考えさせられました。またこの研修は、英語の勉強をより頑張ろうと思えるきっかけを与えてくれました。約1週間という短い期間なのにも関わらず、私自身あまり多くのコミュニケーションが取れなかったということが1つの後悔です。やはり研修中、自分が伝えたいことを英語にできないことがあったり、なんとなくは聞き取れるけれど細かくは理解できなかったりということは少なくなく、不自由なく色々な話をしたかったなというのが本音です。また英語関係なく、自分の気持ちを言語化する大切さを学びました。人とコミュニケーションをとる時、日本語であっても、自分が思っていることや感情を上手く表現できないことが多いので、英語で話すこと以前に自分の気持ちを言語化できるようになりたいなと思いました。将来英語で自由にコミュニケーションを取れるようになりたいという思いが強まったので、受験に向けての英語の勉強はもちろん、もっと話す練習をしていきたいです。

この研修を通して、自分が想像していた以上に新しい景色を見ることができ、言葉では言い表せないほどの感情を何度も得ました。高校生というこの時期にこのような経験ができて本当によかったです。このような機会をくださり、サポートをしてくださった先生方、JTBの皆様、家族など携わってくださったすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

UC バークレー時計台と生徒

同窓会発行の書籍について

佐渡高校同窓会発行の書籍の在庫があり、下記の価格で頒布しています。（知り合いで歴史に興味のある方がいましたら、ご紹介下さい。）

▼問い合わせ・購入は同窓会本部事務局まで
（電話 0259-57-3416）

- ●同窓のおとずれ　送料込　5,000円
- ●佐渡高等学校百年史　送料込　3,000円
- ●近世先賢書簡集（萩野由之博士蒐集）　送料込　10,000円
- ●伊藤氏日記　送料込　5,000円

緑緑寿（六六寿）を祝う会

昭和51年卒業の首都圏在住の仲間は毎年同級会を開催していて、20～30人の参加者で親交を深めている。そんな仲間から、佐渡での同級会をやろうぜ！との連絡がきた。

確かに2018年に還暦で集まって以来、佐渡での同級会を開催していなかった。次の開催は「70歳の古希」だな～と考えていたのだが、島内で毎回幹事をしている仲間に声をかけてみた。結果、「じゃあやろうよ。」という事になった。

なんか理由がいるよな～と調べてみると、「六六歳は緑々寿」というのがヒットした。という事で、「緑々寿を祝う会」と銘打って令和6年8月15日に浦島を会場に開催の運びとなった。

葉書を出すと、314名の内約60名が住所不明。海外在住3名。結局出席43名での開催となった。全員で記念写真・乾杯のあと一人ずつ近況報告のスピーチ。久しぶりに会うメンバーもいて、話に聞き入ってしまった。高校時代に短ランを着ていたガタイの良いS君が「俺がストーブのそばに暖まりに行くと、皆がサ～と居なくなるのが寂しかった。」のスピーチにはみんなで笑った。「おまえ、怖かったんだよ～あの頃。」（と言う者あり！）

閉会前に、全員で「校歌」「応援歌」「蒼穹高く」を歌ってお開きとなり、二次会は、ほぼ全員が参加して近くのカラオケ店でまたまた話が盛り上がる。一方ではあの頃流行った歌を何人かで歌っていた。「楽しかったよ。次回は古希だね。また頼むよ。」と我々幹事団に手を振って皆帰路についた。

昭和51年卒　小林　泰英

令和７年度 同窓会役員名簿

会長	鈴木啓介
副会長	永田治人
副会長	林　隆行
副会長	石見裕子
副会長	引野紀子
顧問	中川哲昌
顧問	中山秀英
顧問	弾正佼一
顧問(旧紫苑会)	天池範夫
顧問(校長)	川上豪
監査	濱田毅
監査	中川恒男
監査	児玉功

相川支部長	竹田裕
二見支部長	坂本久和
沢根支部長	近江和芳
河原田支部長	林　隆行
二宮支部長	渡辺直樹
八幡支部長	金子邦朗
金沢支部長	畠山茂樹
金・吉井支部長	西田健司
両・吉井支部長	本間聡
新穂支部長	板垣徹
畑野支部長	渡部義雄
真野支部長	山本充彦
羽茂支部長	小橋敞膺

小木支部長	深野俊之
赤泊支部長	金田淳一
松ヶ崎支部長	計良武彦
岩首支部長	西　美和子
水津支部長	清田　惠
河崎支部長	本間浩人
両津支部長	尾潟恒雄
加茂支部長	安福征矢
内海府支部長	木村和彦
両・外海府支部長	
相外海府支部長	地多正光
高千支部長	山本雅明
金泉支部長	今井茂樹

評議員	摩尼義晴
評議員	本間栄三郎
評議員	山本ミチ子
評議員	浅島　誠
評議員	須藤健一
評議員	関川敬義
評議員	和泉　徹
評議員	立壁邦子
評議員	古賀洋子
評議員	北見千香子
評議員	山下英子
評議員	中山道夫
評議員	金森大蔵

評議員	大崎直樹
評議員	加藤恭子
評議員	本間健人
評議員	相田武康
評議員	吉田秀樹
評議員	村田慶朗
評議員	渡部　尚
評議員	加藤　健
評議員	関根敬子
評議員	岩崎隆寿

寄贈図書抄

令和6.7月～令7.7月

著　著　名	著　者　名	寄　贈　者	年月
季刊　朱鷺　第62･63･64･65号	朱鷺俳句会　赤塚 五行	赤塚 守(昭和44年卒)	令6.7～
郷土から問う 歴史学と社会科教育	伊藤純郎　監修 武藤正人 大場大輝 菅野剛 加藤将 石田尚子 小貫篤　編	渡部 義雄	令6. 9
純正社會主義の哲學 (生物進化論より説明せる社會進化の理想)	北　輝次郎	矢田 有年	令6. 9
獅子の会卒業50周年記念アルバム	第19回 昭和44年卒業生	幹事　赤塚 守	令7. 7

訃報

令和6年8月から令和7年7月20日までに事務局に連絡のあった方々です。生前のご厚誼を深謝し謹んでご冥福をお祈りいたします。

区分	氏名	出身	年月
昭和30佐高	日下部(逸見)清美	真野	令和4年3月
昭和36佐高	佐山　忠	八幡	令和4年6月
昭和20中④	粕谷　昭	吉井	令和4年9月
昭和30佐高	梶(金子)桂子	八幡	令和4年12月
昭和30佐高	清水　利一	二宮	令和4年12月
昭和20中④	城鳥　慶隆	金沢	令和4年12月
昭和16河高女	中川(本宮)八枝	畑野	令和5年4月
昭和19河高女	土屋　ミチ	二宮	令和5年5月
昭和30佐高	石川(斎藤)千鶴子	二宮	令和5年6月
昭和26佐高	伊藤(伊藤)政子	相川	令和5年6月
昭和17河高女	大森(磯辺)トシ子	畑野	令和5年6月
昭和30佐高	木村恒雄	河原田	令和5年6月
昭和26佐高	中山友徳	河原田	令和5年7月
昭和21河高女	土屋(土屋)シカ	畑野	令和5年10月
昭和41佐高	星野哲二郎	両津	令和5年10月
昭和19佐中	城野(川上)廣	新穂	令和5年10月
昭和24中央高併中	成田(本間)陽子	新穂	令和5年11月
昭和33佐高	清田文武	水津	令和6年1月
昭和16河高女	金子(本間)美知子	沢根	令和6年1月
昭和37佐高	佐々木(岩崎)マツヱ	河原田	令和6年1月
昭和35佐高	藤ヶ谷(菊池)テル子	真野	令和6年1月
昭和29佐高	本間(多田)敏子	二宮	令和6年1月
昭和37佐高	板倉　健	畑野	令和6年2月

区分	氏名	出身	年月
昭和42佐高	影向里美	羽茂	令和6年2月
昭和38佐高	轡田文紘	河崎	令和6年3月
昭和32佐高	世良田(藍原)文雄	新穂	令和6年3月
昭和30佐高	福田(嶋元)昭子	金沢	令和6年3月
昭和30佐高	中川(海老名)くみ	羽茂	令和6年3月
昭和28佐高	近藤(寺島)修	松ヶ崎	令和6年5月
昭和35佐高	杉本(中川)安江	畑野	令和6年5月
昭和28佐高	金刺克彦	河原田	令和6年6月
昭和26佐高	小田仁之輔	真野	令和6年6月
昭和19佐中	駒形　慰	河原田	令和6年7月
昭和31佐高	藤原(斎川)貞子	八幡	令和6年7月
昭20中④	浦本辰巳	河原田	令和6年8月
昭和41佐高	橋本(村川)佳代子(ムツ)	小木	令和6年8月
昭和25高旧	藤村久二夫	金沢	令和6年8月
昭和31佐高	柴田芳夫	加茂	令和6年8月
昭和27佐高	児玉信雄	吉井	令和6年8月
昭和58佐高	板倉　勝	畑野	令和6年8月
昭和23佐高女併中	川本(三浦)陽子	月布施	令和6年10月
昭和26佐高	中川(碓井)貞夫	畑野	令和6年11月
昭和46佐高	藤木秀成	二宮	令和6年11月
昭和46佐高	山本和彦	金沢	令和6年12月
昭和22河高女	野崎(後藤)文子	両津	令和7年1月
昭和22河高女	白鳥逸子	二宮	令和7年1月

区分	氏名	出身	年月
昭和42佐高	後藤(仲野)則行	吉井	令和7年1月
昭和31佐高	小出清治	二宮	令和7年1月
昭和21河高女	戸田(青野)セツ子	沢根	令和7年2月
昭和27佐高	掃部利久	吉井	令和7年2月
昭和32佐高	伊藤正紀	二宮	令和7年3月
昭和44佐高	鈴木敏雄	金沢	令和7年3月
昭和40佐高	若林信正	河原田	令和7年5月
昭和40佐高	中川(城野)カヨ子	新穂	令和7年7月

【お願い】

同窓会事務局へのご連絡は、事務局職員の居る左記の時間にお願いします。

毎週月曜日・木曜日　9時～12時

電話番号
0259-57-3416(直通)

FAX
0259-52-5253

メールアドレス
sadohs-dousou@sadosv.com

※住所変更・訃報のお知らせなど、ハガキ、FAXまたはメールでいただけますとありがたいです。

佐渡高等学校同窓会
公式LINE
（2023年スタート）

編集後記

◆同窓会会員の皆さまにおかれましては、日頃より同窓会の活動にご支援とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。皆さまのご協力のおかげで、今年度も『同窓会報』を発行することができました。ありがとうございます。会報を通じて、同窓会活動が活性化し、同窓生各位の絆がさらに強くなることを願っております。

◆同窓会の維持会費につきましても、多くの会員の方に納めていただき感謝しております。引き続き会費の納入をお願いします。今回の『同窓会報』にも、会費を納めていただいた方のご芳名をあげさせていただきました。

◆令和七年度も、昨年同様に鈴木会長のもと同窓会総会及び懇親会も実施します。ぜひご参加ください。

※会報の原稿をお送りいただく場合は、六月末日までにお願いいたします。

（同窓会事務局　石川万寿美、本間睦子）